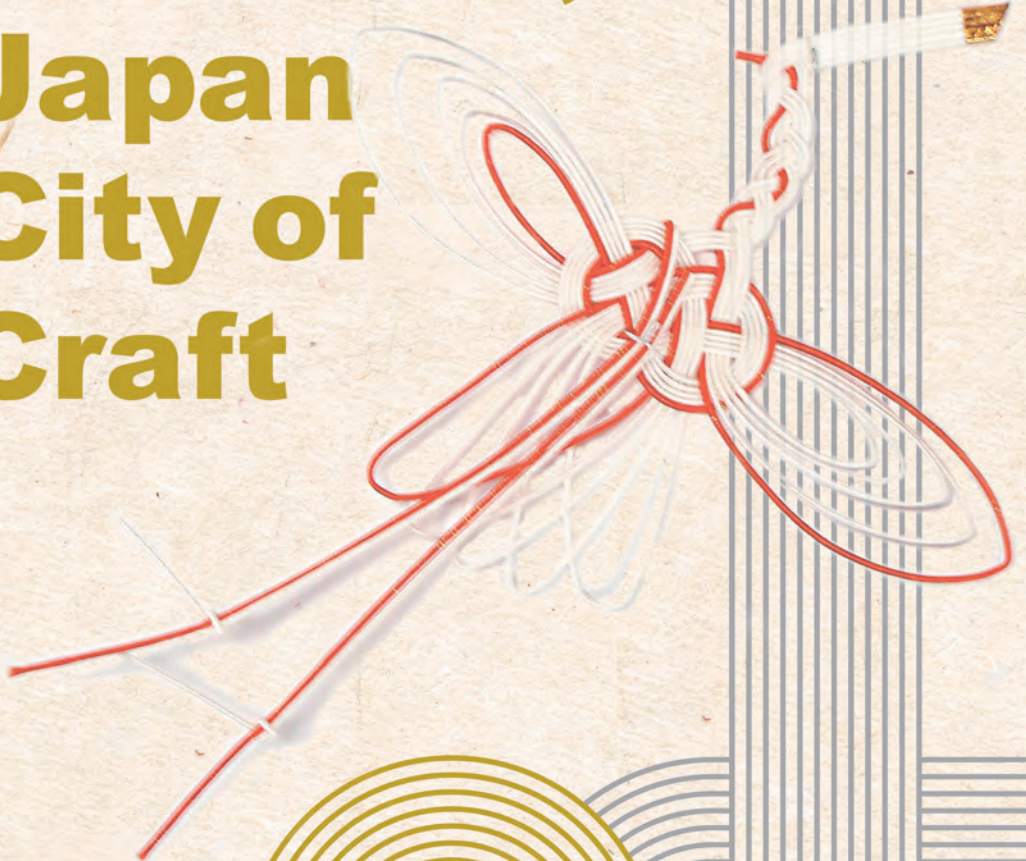


K

**anazawa,
Japan
City of
Craft**



市長あいさつ

金沢は、豊かな自然に恵まれ、歴史的な美しいまちなみが今に残るとともに、多様な伝統工芸が市民の暮らしに息づく日本でも比類なき手仕事のまちであります。こうしたまちの個性を貴重な財産として継承するとともに、未来に向けて新たな息吹を吹き込んでいくことが、「歴史に責任を持つまち」としての金沢の責務と考えています。

その基礎は、今から420年前、近世の日本において、この地域を統治した加賀藩主前田家によって確立されました。前田家の歴代藩主は、戦争を避ける一方、漆、金工、焼き物、染めなどの工芸や茶の湯、能、邦楽などの芸能を奨励しました。文化と結びついた工芸は、市民の暮らしに根ざし、美に対する豊かな感性と格調高い技芸を育むとともに、そこで培われた工芸職人の技へのこだわりや革新的意識は、現代の企業家精神へと受け継がれ、いくつかの特異な分野で高付加価値産業を創出してきました。すなわち藩政期以降、異文化や異業種との交流の中で、絶えず伝統に革新の営みが加えられ、このことによる付加価値の集積がまちを支えてきたという経緯があります。

今後、グローバル化に埋没しない個性を持った都市として、文化多様性の実現に寄与すべく世界の様々な都市との交流を進め、その個性を内外に発信していきたいと思っています。また、発展途上国などにおける工芸の振興や人材の育成をはじめとする国際協力や世界平和に積極的に貢献していきたいと考えております。

ぜひとも、そうした機会を提供していただけるよう、創造都市ネットワークへの登録について、特段のご配慮を賜りますようお願いいたします。

金沢創造都市推進委員会会長
日本国 金沢市長 山出 保



■ 概 要

(はじめに)

金沢市は21世紀の都市像として、創造都市の重要性を認識し、文化と産業の連環によりまちが発展してきた経験や、独自の創造都市政策の実績をもとに、クラフト創造都市としての登録を目指し、ネットワークの一員として、文化的多様性の実現と世界平和に積極的な貢献を図ることを期する。

(金沢の歴史と特徴)

人口45万人の中規模都市である金沢は、戦国武将の前田利家による城下町の建設以来、第二次世界大戦でも戦禍に遭わなかった日本有数の非戦災都市として、420年余にわたる平和のうちに、独自の武家文化を育み、伝統的なまちなみ景観や生活様式とともに、類まれな工芸が発展し、保存継承されてきた日本を代表する伝統的工芸都市である。

独自の武家文化は、今日の金沢の伝統文化（能、茶道）や食文化の底流となり市民の質の高い生活を維持し、歴史的に培われた金沢の精神風土が鈴木大拙や西田幾多郎などの様々な思想家を生み出した。

(金沢の伝統工芸)

現存する主な伝統工芸は22種類にのぼり、その多彩さは京都を凌ぎ、日本一であり、その特徴は以下の点にある。



第1に、加賀地域伝来の素材、技術に、先進地であった京都のデザインや技法などを融合し、独自の領域を確立し、京都よりも高い評価を受けていること。

第2に、武家文化独特の豪華さと、町衆の厚い信仰心などを背景とした繊細さの両面をもつ、加賀調のデザインが確立されていること。

第3に、現在まで、市民のくらしの中に工芸品が活かされ生活の質を高めるとともに、工芸的なものづくりの精神が産業にも生かされていること。

また、工芸作家は今日も金沢城址を中心に多数活動しており、伝統工芸分野における金沢の人口一人当たりの重要無形文化財保持者（人間国宝）の数は日本一の水準である。

代表的な工芸

名 称	概 要
加賀友禅	<p>加賀梅染に、江戸時代に友禅染めの祖である宮崎友禅斎が彩色を手掛けて以来、高いブランド価値を維持している。</p> 
金沢箔	<p>藩祖前田利家が箔の製造を命じて以来発展し、現在は金箔製造の99%を占めている。</p> 
金沢漆器	<p>藩細工所に呼び集められた蒔絵師、五十嵐道甫や清水九兵衛により技術が伝えられ発展した。</p> 

(現代の工芸)

金沢市は工芸を文化と経済の両面から積極的、継続的に支援しており、世界的な工芸コンペティションの開催や、国連機関との協働による発展途上国の工芸振興を目指す取組を進めている。

金沢市が工芸を重視し、産業界と協力しながら多面的な工芸産業振興に取り組んでいることは、予算面にも表れており、近年、金沢市の一般会計予算がマイナス傾向となっている中で、工芸関連予算については、プラス傾向が続いている。

また、人材の育成に関して特筆されるのは、学術文化を奨励し平和を希求する金沢という都市の精神風土の発露として、第2次世界大戦終戦から1年足らずで市立の美術工芸大学を設立し、後継者の育成に努めていることである。

さらに、伝統的な工芸に現代産業やハイテク技術を融合させ商品開発を進め、海外に発信していく新たな挑戦も進められている。

金沢市の文化政策は多面的で先進的な内容を持っており、文化関連経費(文化芸術・文化財)の歳出決算額に占める割合は、日本の自治体の平均が1%未満であるのに対し、金沢市では約3~6%を占めていることにも示されている。

(金沢の創造経済)

伝統に革新の営みを加えなければ、単なる「伝承」に堕してしまう。学術文化が経済に刺激を与え、付加価値を高め、発展した創造経済がまた学術文化を支えるという、文化と産業の連環によって金沢というまちはつくられてきた。

工芸的なものづくりの精神は、江戸時代のからくりから繊維工業と繊維機械工業の両輪による独自の産業革命を可能とし、数多くのニッチトップ企業を生み、それらが地域内で緊密な連携をとって発展し、現在ではコンテンツ分野等の新領域で活躍する企業も登場している。

これらの企業による文化的投資と、工芸品に親しんだ市民の質の高い生活を背景とする高感度の消費市場によって金沢独自の文化と産業の連環による創造経済が生まれ出されている。

金沢市はすでに、経済界と市民、行政が手を携えて、官民一体となった創造都市への取組を進めており、さらに、今般のクラフト都市への申請にあたっては、行政と工芸団体、経済団体、市民団体からなる金沢創造都市推進委員会が組織されている。

(おわりに)

ユネスコ創造都市ネットワークに金沢市が登録されることは、以下の点で、日本やアジアをはじめ、世界の都市と市民にとって大きな意義がある。

第1に、アジア、特に日本におけるクラフト都市の登録が文化的多様性の実現に資すること。

第2に、世界の都市の中で、大多数を占める人口30~50万人規模の都市の代表となりうること。

第3に、化石燃料を大量に消費しない工芸・手仕事のまち金沢は、地球規模の課題である環境面からもネットワークの発展に貢献できること。

そして、第4に、これまでの独自の創造都市政策を、さらにネットワークを通じて展開していくことで、世界、特に発展途上国の工芸振興、ひいては世界平和の実現に貢献ができること。

また、他のユネスコ創造都市とともに、金沢市は、市場における芸術家同士の交流やネットワークのメンバーが経験できるクリエイティブ・ツーリズムの機会を創り出すこと、さらに、ユネスコ創造都市のメンバーの間で革新的な技術のデザインを高めるための工芸技法についての交流といった分野に参加していくよう心がけていくこと。

目次



はじめに 07

I. 金沢の歴史と特徴 13

- (地理) 14
- (歴史) 15
- (文化的生産) 17

II. 金沢の伝統工芸 21

- (1) 工芸都市としての金沢 22
- (2) 主な伝統工芸品 23

III. 現代の工芸 38

- (1) 工芸の振興政策 39
 - (多様な主体による取組) 39
 - (現代工芸の新たな可能性) 42
- (2) 工芸振興の基盤 44
 - (人材養成機関) 44
 - (工芸に関連する諸施策) 48
 - (新しい文化創出の拠点) 50

IV. 金沢の創造経済 52

- (1) 創造経済における工芸の役割 53
 - (地域内発型企業の発展) 53
 - (文化的投資・消費) 57
 - (新たな創造産業の展開) 58
- (2) 官民一体となった創造都市への取組 59

おわりに 61

【参考資料】 63

- ▼金沢創造都市推進委員会名簿 63
- ▼金沢の主な伝統工芸(22業種) 65
- ▼工芸関連団体の現況 70
- ▼団体等のホームページ 72
- ▼金沢美術工芸大学の変遷 73
- ▼金沢美術工芸大学の卒業生数(デザイン及び工芸) 74
- ▼金沢美術工芸大学の卒業生たちの活躍状況 75

【別添】 78

- ▼世界工芸都市宣言(1995年9月26日) 78
- ▼伝統工芸と環境に関する金沢アピール(1997年11月7日) 79
- ▼金沢アジェンダ(2008年10月17日) 84

はじめに

金沢は、人口45万人の人的規模の都市であり、旧市街地を中心に黒光りする屋根瓦の続く落ちついた家並み、伝統芸能や伝統工芸を育む生活文化の営み、市内を流れる犀川と浅野川の二条の清流と緑濃い周辺の間山々々に囲まれた豊かな自然環境に恵まれるとともに、文化と経済のバランスの取れた、持続可能な創造都市としての評価を受けている。

例えば、創造都市論の世界的リーダーであるチャールズ・ランドリーはその著書『創造都市』日本語版序文において、金沢をボローニャやモントリオールと並ぶ日本の創造都市のモデルであると述べており、また、2008年3月には、日本の文化庁が新たに設置した「文化芸術創造都市」に選定され、文化庁長官が金沢市を表彰しており、日本の創造都市の代表であると言っても過言ではない。

美しい金沢の四季





このように、金沢市が内外から創造都市として評価される理由は、20世紀末に、古くなった紡績工場の煉瓦造りの倉庫を「1日24時間、1年365日」市民が自由に芸術活動に使える画期的な参加型文化施設である「金沢市民芸術村」に再生して話題を集め、21世紀初頭には、自らのアイデンティティである伝統文化の壁に挑戦しつつ都心に現代アートを中心とした「金沢21世紀美術館」を創出して、新世紀にふさわしい市民文化を創造しようとし、さらには21世紀の世界の都市のあり方を探求し、都市政策の実験の場を提供しようという新しいタイプの国際会議である「金沢創造都市(金沢ラウンド)会議」を提唱するなど、革新的な政策を次々に展開してきたからである。



金沢市民芸術村



金沢21世紀美術館

しかし、創造都市・金沢は21世紀に突如として出現したのではない。歴史的、持続的に文化と経済が相互に浸透しながら金沢固有の「文化的生産システム」が形作られてきたのである。

金沢市の起源は1583年に、戦国武将の前田利家がこの地域を支配し、金沢城を中心とする城下町を開いたことによる。前田藩は、江戸幕府に次ぐ所領を擁したが、武力で対抗する道を捨て、学術文化を奨励した。以来、420年余にわたって大きな災害に遭うことなく、また、第二次世界大戦が終戦して間もない1945年10月には、今年で64回目を迎える石川県内最大規模の公募展「現代美術展」の第一回展が、「美術文化の向上による新日本建設への寄与」を掲げて開催されているように、国内でも数少ない非戦災都市としての責務を自認し、これまで平和のうちに経過したことが、伝統的な文化やまちなみ景観、生活様式とともに、類まれな工芸が発展し、保存、継承されることにつながった。

加賀友禅や金箔工芸などに代表される美術工芸は、創造者である工芸作家と職人、そして消費者である武士や町衆、市民によって長い歴史の中で洗練され、独自の様式を発展させた。こうして金沢は日本を代表する伝統的工芸都市としての輝かしい地位を誇るようになった。

さらに金沢は、明治維新以後の近代化の過程において、繊維産業や機械工業を軸とする独自の産業革命を成し遂げ、職人氣質と近代技術を融合させた新たな工芸を生み出すことも怠らなかった。例えば、ユニークな外観で建築としても世界的な注目を集める金沢21世紀美術館は、伝統工芸と先端的なアートとの融合を試み、創造性豊かな人材養成の拠点としても機能し始めている。伝統に革新の営みを加えなければ、単なる「伝承」に墮してしまう。学術文化が経済に刺激を与え、付加価値を高め、発展した経済がまた学術文化を支えるという、文化と産業の連環によって金沢というまちがつくられており、金沢にとっての工芸は、独自文化の結晶であると同時に、経済を支え、まちを発展させる原動力として捉えることができるのである。また、将来にわたり、本市の総合的な都市づくりの指針である「金沢世界都市構想」において、絶えず革新への営みを心がけていくことを市政の根幹としており、金沢は、まさに創造都市の理念に合致した挑戦を実践してきた都市であるという自負がある。

今般、金沢市は21世紀の都市像としての創造都市の重要性を認識し、平和のうちに文化を育むことを体現し、工芸が日常生活の中に根付き保存・継承されてきたとともに、文化と産業が連環することでまちが発展してきた経験や、独自の創造都市政策の実績をもとに、ユネスコ創造都市ネットワークのクラフト都市としての登録をめざし、グローバルネットワークの一員として、文化的多様性の実現と世界平和に、積極的な貢献を図ることを期すものである。

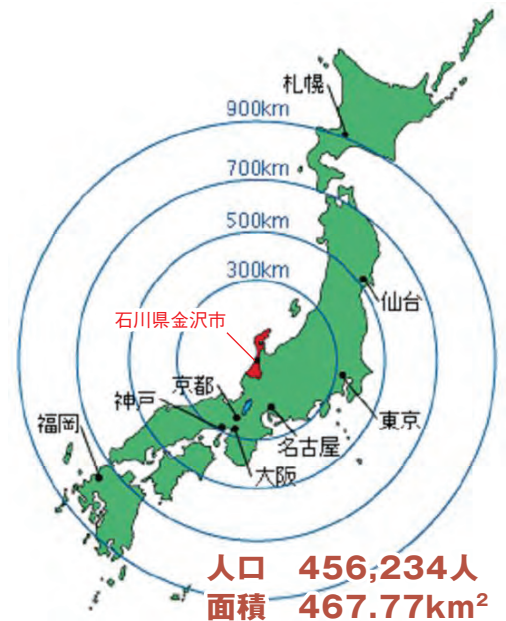


I. 金沢の 歴史と特徴

地 理

金沢市は日本列島の中心をなす本州のほぼ中央部の日本海側に位置する、人口45万人の中規模都市である。

古来、この地はアジア大陸に展開する中国、朝鮮、シベリアとの間で人・もの・情報の交流が盛んであり、自然環境にも恵まれ、豊かで個性的な文化を育んできた。さらに、中世から近代にかけては、日本の首都がおかれた京都や江戸（東京）との間で学術文化・経済などの交流を積極的に展開して、日本海沿岸地域における最大の都市として繁栄してきた。



金沢の位置

金沢は四季の変化が明確な土地柄で、その気候は日本海岸気候区に属し、年間降水量は全国有数を誇る。日本海沖を流れる対馬海流により同緯度の周辺地域と比較して冬季の寒さが和らぐ一方で、その水蒸気が北西季節風によって運ばれ降雪がもたらされる。冬季は特に曇天の日が続き日照時間が少なく、湿潤で重い積雪がある。

市域は、西を日本海に面し、東に白山山系の山並みが続いている。この地形を背景として、金沢の旧市街地は、3つの丘陵（卯辰山・小立野・寺町）と2つの河川（浅野川・犀川）からなる変化に富んだ構造を有している。

浅野川と犀川によって形成された河岸段丘に広がる市街地には、地形の高低差がつくる坂道や眺望のよい高台など、このまちの様々な表情がうかがえる場所が各所に存在している。また、市街地を南西から北東方向に連なる台地には豊かな緑が残り、河川からの用水が市域に張り巡らされており、都市内に水と緑の回廊を形成している。



金沢の地形

歴史

「金沢」という名の起こりは、地元から産出した砂金を洗った沢を金洗沢と呼んだことに由来しているという説が有力であるが、都市としての淵源は約500年前、一向宗の宗徒（門徒）によって日本の中世には例外的な農民による自治政府が出現したことに遡る。その後の約100年間にわたって「百姓のもちたる国」が繁栄し、その拠点となったのが16世紀中頃に建立された金沢御堂とその寺内町、現在の金沢城一帯である。

金沢御堂は本願寺・一向宗徒の加賀における拠点であったが、一向一揆鎮圧のあと金沢御堂跡に金沢城が構築され、かつての寺内町を取り込み城下町が建設された。城主となった前田家は、加賀・越中・能登三カ国約120万石を領有した江戸時代最大の大名であり、金沢はその政治・経済・文化などの中心都市として約300年間繁栄した点で、日本の城下町の代表であるとともに、それを取り巻く有力家臣団を中心とした小城下町群から構成された複合的構造を持つ城下町でもあった。城郭を中心に旧街路や町割り、庭園群、用水網、広見などが整備され、欧州の都市のような城壁こそないが、周辺に防御を兼ねた寺院群を配した独特の都市景観は、現在も保持されている。

江戸時代、加賀前田藩は武力で幕府に対抗する道を捨て、文治主義を選択し、学術と工芸と芸能を奨励、普及した。全国から著名な学者を招き、著作活動を支援し、江戸時代中期の高名な儒学者である新井白石をして「加賀は天下の書府である」と言わしめた。17世紀に開かれた御細工所は、元来、武具の修理を任務としていたが、転じて城中のさまざまな調度、什器に携わる職人工房となり、京都や江戸から名工を指導者として招いて金工・蒔絵などの工芸職人を養成した。また、藩主は自ら能や茶の湯を嗜み、それが家臣や町民にも広く普及したのである。御細工所の職人は、一日おきに能の稽古に通ったとも言われている。こうして、17世紀後半には、加賀藩に「百万石文化」と称される武家文化が確立されていった。

明治維新後の廃藩置県によって藩主・前田氏が東京に去り、武士階級が零落すると、維新当時、東京、大阪、京都に次いで多かった人口が、13万人から8万人へと急減していき金沢は時代に取り残されるかと思われた。

しかし、1890年代に入ると新興実業家を中心として独自の産業革命を成し遂げ、金沢は新しい歩みを踏み出したのである。城下町から金沢を変身させたのは、輸出羽二重の生産を中心とする繊維産業と、それを支えた繊維機械工業の発展であった。

この発展の基礎となったのが江戸時代に藩が勧めた工芸であった。御細工所に全国から招かれた名工たちは、象嵌、鋳物、指物等の指導を行い、町方にも腕利きの職人たちが揃っていった。そして江戸時代後期には「からくり」などの当時としては先端的な工芸が発達していた。これらの名工たちは明治維新によって加賀藩というパトロンを失うと零落したことは事実であるが、繊維産業の興隆と結びついた自動織機の開発と生産などで新しい道を開く地域イノベーターが登場した。

代表的なケースは、津田米次郎である。彼の父親、津田吉之助は大工の棟梁であり、明治初期の金沢を代表する名建築の一つ、前田利家を奉る尾山神社の神門（重要文化財）の造営工匠長を務めた。これは、中国風の門構えの上に、ステンドグラスの入った窓を持つ鐘楼が乗り、遠く日本海を航行する船の灯台の役割も演じたという当時としては前衛的なデザインの建造物であった。彼は建築以外にも「からくり」の名工として有名で、1875年に群馬県の富岡製糸工場の機械を見学し、これを模造すると、新興起業家であり、後に二代目の金沢市長となる長谷川準也が興した金沢製糸会社の工場に備えつけた。

その息子、米次郎と従弟の駒次郎が独自の機構を開発して「津田式絹動力織機」を生産したのはそれから10年後のことであった。駒次郎が興した津田駒工業は現在、世界的に評価されるウォータージェットルームなど高速革新織機のメーカーとして活躍している。このように江戸時代の職人の技能やノウハウが、革新されて近代工業に生かされ発展していったのである。

歴史的に見た創造都市としての金沢の特徴は、

第1に、1583年、戦国武将前田利家が金沢城を中心とする城下町を形成して以来、425年間、戦禍に遭うことなく、平和を愛し、文化を育み、自律した経済を持続させてきた人間的規模の都市であるといえる。

第2に、江戸時代において、歴代藩主が美術工芸・学術文化を奨励して、「百万石文化」と称される武家文化を確立した。これらは明治以降の近代化の中でも形を変えて持続し、今日の金沢文化－思想、美術工芸、伝統文化（能、茶道）、食文化の底流となり、市民の高い生活の質を維持するものとなっている。

第3に、明治以降の近代化の過程において、工芸的ものづくりの知恵と伝統を活かした独自の産業革命を成功させて、繊維工業と繊維機械工業とを両輪とする持続的な産業発展により、経済と文化のバランスの取れた都市経済構造を実現することになった。

第4に、第2次世界大戦後の高度経済成長と、その後のグローバル化の影響の中で、繊維産業が高成長とその後の衰退に直面すると、これまで蓄積した文化資本や知識資本を活用して先端的な芸術と伝統工芸との融合の中で新たな創造的文化産業の育成に挑戦していることである。

文化的生産

このような内発的発展を経験した金沢の都市経済の特徴は、持続的に発展を遂げた中堅・中小企業が多数集積していることである。これらには職人気質に富み、イノベーションを得意とし、独自技術を持ち“すき間分野”でのトップシェア（ニッチトップ）を維持する企業が多く、相互に刺激し合いつつ発展を遂げる自律性の高い都市経済をもたらしている。

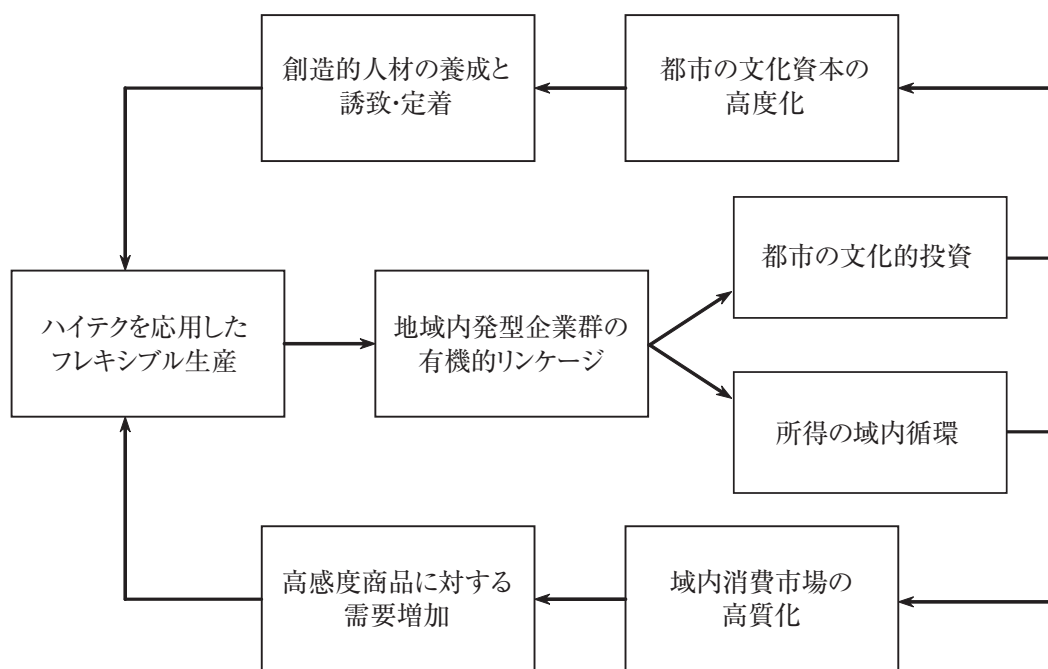
具体的には、先述のとおり、まず繊維工業と繊維機械工業とが地域内で相互連関的に発展を遂げたが、近年は工作機械や食品関連機械、出版・印刷工業、さらにコンピュータ関連産業までが展開された多彩な産業連関構造を保持するとともに、市民の「生活の質」を豊かに支える伝統産業や食品工業、アパレル産業等も発展をみている。

この内発的発展が外来型の大規模工業開発の抑制につながり、産業構造や都市構造の急激な転換が回避されてきたため、江戸時代以来の独特の伝統産業とともに歴史的なまちなみや周辺の自然環境などが守られ、金沢はアメニティ豊かな都市美を誇っている。そして、近代化以降も失われなかったこの独自の都市経済構造が、地域内で生み出された所得の域外への「漏出」を防ぎ、中堅企業の絶えざるイノベーションや文化的投資を可能にしたのである。

また、この都市経済構造が情報産業や各種のサービス業を発展させ、さらに大学（金沢大学、金沢美術工芸大学、金沢工業大学など13大学）や専門学校、多数の博物館や資料館等の学術文化の集積をもたらし、独自の質の高い都市文化が生み出された。つまり、経済余剰の都市内循環により、高質の文化資本や知識資本が保持されているのである。

このように質の高い文化的集積によって都市経済の発展を図る新しい産業発展の方式を「文化資本を生かした文化的生産」と呼ぶことができる。金沢がこれまでに実践し、また、めざしている「文化的生産」の要点をまとめると、

- ① 生産工程では職人的技能や感性とハイテク機器の結合によって文化的付加価値の高い財やサービスを生産し、
- ② 生活文化財産業からメカトロ産業、ソフトウェア・デザイン産業にまで至る地域内発型企業の緊密で有機的な産業連関構造を構築することによって、
- ③ 地域外から稼いだ所得が地域内で循環するとともに、これが新たな文化的投資と文化的消費に向かい、
- ④ 文化的投資は、美術館の建設、民間のデザイン研究所や、オーケストラ等の運営を支援し、都市の文化的集積を高度化することによって、文化的生産の担い手となるハイテク・ハイタッチの創造的人材を養成し、地域に定着させる一方、
- ⑤ 文化的消費は文化性・芸術性に富んだ財やサービスを楽しむ能力をもった生活者によって、地元の消費市場を高質化し、文化的生産への需要を喚起するような生産と消費のシステムということになる。



文化的生産システム

このようなシステムの源泉となっている金沢独自の文化は、歴代藩主による学術文化の庇護・奨励、長きに渡り保たれた平和のうちに、江戸時代から連綿と、市民生活にまで浸透し、受け継がれてきたものである。さらに、歴史的に培われた金沢

の精神風土は、伝統工芸や芸能を市民一人ひとりが嗜む土壌につながり、日本の禅を海外に広く知らしめた鈴木大拙、日本を代表する哲学者・西田幾多郎など様々な思想家を生み出した。

例えば、加賀藩は加賀宝生と呼ばれる能楽を保護するため、町方にも演技習得を奨励したことから、金沢では、植木職人が庭木を剪定しながら謡を口ずさむようになり、「空から謡が降ってくる」と形容されるほど、現在でも能が市民生活に息づいている。また、西田幾多郎の影響を受けた新渡戸稲造の「武士道」において、精神修養の実践として儀式以上の芸術と謳われている茶の湯文化も、市民の暮らしに根付き、茶器として発展した大樋焼や供される和菓子は、日々の生活の中で親しまれている。春夏秋冬それぞれの季節に決まって食される和菓子もあり、特に、色彩豊かで繊細な上生菓子は、高度な職人技術が生み出した芸術と言えよう。



茶の湯



金沢の和菓子(春に食される金花糖)



金沢の和菓子(上生菓子)

あらためて、歴史的展開の中で金沢における「文化的生産」を位置づけると、それは、ある意味で江戸時代に始まった工芸的生産の復活と再構築といえるものであろう。中世の職人的生産(クラフト・プロダクション)から産業革命による大量生産(マス・プロダクション)を経て再構築された現代の文化的生産(新しいクラフト・プロダクション)が、まさに、江戸時代以降培ってきた「工芸的生産システム」の発展の上に築かれてきたところに、創造都市としての金沢の特徴がある。

工芸や職人的なものづくりの精神は、学術文化の集積があってこそ、発展し、新たな付加価値を作り出すことができる。金沢には、およそ半世紀にも及び培われた学術文化を背景とする工芸やものづくりの精神があり、それらが、「用の美」という言葉に集約されるように、機能性と芸術性を併せ持ち、経済的価値と文化的価値のバランスが取れた財やサービスを作り出すことによって、文化的生産システムの展開を可能とし、その中心に位置づいていると言えるのである。



II. 金沢の 伝統工芸

(1) 工芸都市としての金沢

工芸都市としての金沢の特徴は、歴史的なまちなみ景観の中に、数多くの職人工房が集積し、伝統的な生活様式の中で、今なお、工芸品が日常生活の中で愛用されていることである。その背景には、江戸時代以降の加賀前田藩の工芸振興がある。

「百万石文化」を確立した三代藩主・利常は城内に御細工所を開き、京都と江戸から名工を指導者として招いて金工・漆工などの藩主用の工芸職人を養成し、五代藩主・綱紀は、さらに、その秘伝の技を「百工比照」にまとめた。

「百工比照」は、綱紀が収集し自ら名付けた工芸各分野にわたる製品や技法についての集大成で、一部の資料には産地や呼称などが記され、明確に整理分類されている点に大きな特色がある。資料は材質・用途・形態別に二つの箱に納めて保管されており、釘や真珠などは和紙に一括して包まれている。正確な総点数を数えることは難しいが、二千点以上の数になるといい、国の重要文化財に指定されている。

百の巧みの技術を集め、比べて照らしてみるという創造を刺激する「場」を前田藩が提供し、様々なチャレンジをさせてきたことが、多様な工芸が発展するための基盤を創ってきたのである。藩主のお抱え職人たちは、後に町方においても仕事をし、その工芸品は家臣や町民の間にも普及し、彼らの生活の質を高めることに貢献した。

城下に住む武士、工芸職人や町衆の間には、百万石文化の華ともいえる茶道や能が奨励され、能舞台や茶室を備えた住宅が数多く存在し、独特の景観を維持している。また、寺内町の歴史を踏まえて信仰心が厚く、雪国の風土に根付いた伝統的町家には職人の技を生かした仏壇や欄間など独特の室内装飾が施され、城下町の文化景観と伝統芸能、そして伝統工芸とが一体となって維持されている。現存する主な伝統工芸は22種類にのぼり、その多彩さは京都を凌ぎ、また、吉田三郎（彫刻、日本芸術院会員）、松田権六（蒔絵、文化勲章受章、日本芸術院会員）、高光一也（人物画、文化功労者、日本芸術院会員）、赤地友哉（髹漆、重要無形文化財保持者）、木村雨山（友禅、重要無形文化財保持者）、氷見晃堂（木工芸、重要無形文化財保持者）、羽田登喜男（友禅、重要無形文化財保持者）、寺井直次（蒔絵、重要無形文化財保持者）、蓮田修吾郎（鑄金、日本芸術院会員）、大樋長左衛門（年朗）（陶芸、文化功労者、日本芸術院会員）、村田省蔵（洋画、日本芸術院会員）、大場松魚（蒔絵、重要無形文化財保持者）、魚住為楽（安彦）（銅鑼、重要無形文化財保持者）、中川衛（彫金、重要無形文化財保持者）などの重要無形文化財保持者（人間国宝）や日本芸術院会員を輩出している。なかでも伝統工芸である陶磁、漆・木工、金工、染織の分野においては、多数の作家が全国的に活躍し、金沢の人口1人あたりの重要無形文化財保持者（人間国宝）の数は、東京や京都を凌ぎ日本一の水準であり、まさに日本を代表する工芸都市と言ってよい。

(2) 主な伝統工芸品

以下に、代表的な工芸を紹介してみよう。

まず、国の伝統工芸品産業の振興に関する法律に指定された業種である金沢箔、金沢漆器、加賀友禅、九谷焼、加賀繡、金沢仏壇から見ていこう。

(金沢箔)

金沢箔のはじまりは、加賀藩の藩祖前田利家が1593年に金、銀箔の製造を命じた文書が残っていることから、それ以前には、箔の工人がいたと考えられており、その後、前田藩による煌びやかな武家文化の確立とともに、金沢の箔需要が高まり、江戸時代初期に多くの箔打ち職人が金沢に招かれ、興隆していったものと考えられる。しかし、江戸幕府は金銀の取締りを厳しく行い、17世紀末には、金箔



箔移し

は江戸、銀箔は京都の箔屋以外での製造が許可されなくなった。以降、金沢では禁じられていない真鍮箔の製造や江戸、京都から購入した金銀箔の打ち直しなどにより製箔技術が伝承されてきたが、江戸時代後期にいたって、金箔打ちの公認を求める職人たちの粘り強い運動により、藩の御用箔に限り、金沢での製造が許可されることとなった。

明治時代に入ると、製箔の統制はなくなり、幕府の庇護下にあった江戸での金箔作りが完全に途絶える一方、金沢の高度な箔打ち技術や製箔に適した気候や水質などによる金沢箔の品質が全国に認められていった。さらに、金沢の箔業者・三浦彦太郎の創案により箔打機が完成し、金沢は金箔産地として急速な発展を遂げ、現在では全国生産高のうち金箔は98%以上、銀箔・洋箔においては100%を占めている。

金沢箔は3つの特性「酸化しない、変色しない、腐食しない」を活かし、仏壇や金屏風、西陣織、漆器など、多くの工芸品や美術品などに欠くことのできない資材として広く活用されている。さらに、近年は生活様式の変化に対応して、異業種交流をおすすめインテリア用品、地酒や菓子などの食料品、さらには化粧品にまで幅広い用途が開拓されている。

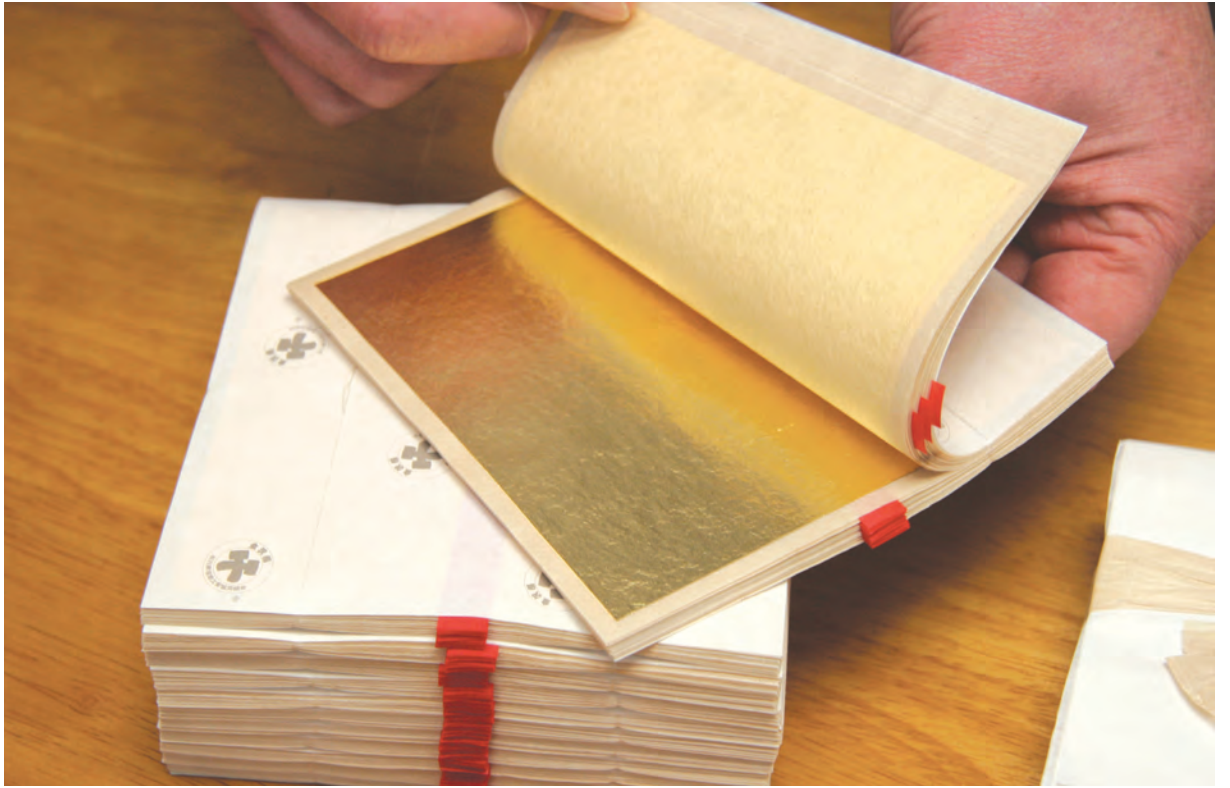


箔打ち

金沢の金箔は世界遺産の修復にも用いられており、1987年に修復された京都金閣寺においては金沢箔が約20万枚、毎年補修がなされる日光東照宮においてはその都度約2万枚が使用されている。これらの世界遺産も、金沢で伝承されてきた箔打ちの技術に高質な金箔を生み出さうる金沢の風土があってこそ、字義通り、輝けると言えるだろう。



金沢箔を使用した工芸品



金沢箔

(金沢漆器)

金沢漆器の最大の特徴は、高度に発達した蒔絵技法による華麗で精密な文様であり、室町時代に将軍家に仕えた蒔絵の名門・京都五十嵐家の五十嵐道甫、さらに、江戸の名工清水九兵衛を三代藩主・利常が招いたことにより、その基礎がつけられた。

このようにして加賀藩によって育成された金沢漆器には、さらに、金や銀の板金を漆に貼り付けた後に研ぎ出し文様を浮かび上がらせる“平文”や、貝殻をはめ込む“螺鈿”、

卵の殻により白色を出す“卵殻”など漆器の加飾技法のすべてが伝えられており、中世以来の蒔絵技法の本流を受け継いだ貴族文化の優美さとともに、力強い武家文化を兼ね備えた独特の漆工芸として発展してきた。これらの技術は御細工所や町方の門人、師弟に伝授され、江戸、明治、大正、昭和を経て今日まで継承されている。

また、金沢漆器は、大量生産ではなく、室内調度品や茶道具などの一品制作を特徴としている。現在は、蒔絵師が大半を占めており、今後は木地師の育成が必要になっている。



作業風景



金沢漆器

(加賀友禪)

加賀友禪は室町時代、加賀地域の独特の技法であった梅の木を材料にした梅染めに遡る。その後の赤梅染め、黒梅染め、加賀憲法染め、色絵紋とともに加賀御国染めとして一世を風靡し、これらの染織技術が源流となり、1712年頃、京都で扇絵師として、また、きものの雛形本の図案を描いていた宮崎友禪齋が加賀に移住したことから、友禪染の基礎が築かれた。



加賀友禪

図案の作成から始まる幾多の制作工程は、すべて職人たちの手仕事によるもので、その特徴は、友禪五彩といわれる臙脂、黄土、深緑、藍、古代紫を基調にした配色により、草花、風物、名所を題材に絵画的表現が息づき、力強くも上品な落ち着きを持っている。また彩色において、補色等の組み合わせを生かしたコントラストの強い色変わりの手法や、葉っぱが虫に食われた状態を表した「虫食い」と称する手法も、観察から生まれた自然美表現の特異なもので、アクセントとしての効果を持っている。狩野派の流れをくみ、草花を中心とした写実的な絵画調の絵柄は、京友禪の紋様的な画風とは対照的である。

工程は手作業によるところが多く量産には不向きであるが、作家の目が行き届くと同時に作家の個性が十分に発揮され、一点一点に温かい手書きの趣がある。金沢の風物詩である仕上げ工程の友禪流しは、生地についている糊や余分な染料を清流の中で洗い流し、友禪の特徴である白い糸の様な輪郭線が模様を浮き上がらせ、加賀友禪の美しさを一層引き立てている。

加賀友禪は近年のポストモダンから本物志向としての加賀調の色調や手法に評価が高まり、京友禪より高いブランド力を有し、不況の中でも健闘してきた。京友禪が大量生産に向かっている頃、加賀友禪はいち早く「落款制」を取り入れ、作家による一貫生産システムを確立し、文化性の高い独創性溢れる生産を軌道に乗せたのである。現在落款を保持している作家は228名であり、後継者も多く、売上額のピークは1997年に180億円を記録した。近年では加賀友禪の技法を応用し、和装小物、インテリア、洋服などの分野で商品開発も進められている。



彩色の作業風景



浅野川の友禅流し

(金沢九谷焼)

金沢九谷焼の起源は、加賀藩が1806年に、すでに約150年前に廃窯となっていた古九谷窯に代わり、九谷焼を再興しようという目的で、十一代藩主・斉広の時、技術者として京都青蓮院の御抱窯として名高い陶工、青木木米を招くことで始まり、木米は翌年（1807年）春日山木米窯を築窯した。木米窯の製品は青磁・赤絵金彩・宋胡録・南蛮・高麗・仁清等に倣ったものと、木米創案のものがあり、木米が金沢を去った後、加賀藩士武田秀平の呼びかけで、民山窯が開窯し、赤絵九谷の元祖となった。

金沢九谷は細密画と盛絵具と、独特の赤を特徴とし、赤絵金彩、金襴手、花詰、細字における細かな筆遣いは、豪華な気品や風格を感じさせる。

九谷焼の魅力である鮮やかな絵柄は、時代とともに次々と新しいデザインが生まれ、今日では、それらのデザインをもとに、多くの作家が活躍している。



金沢九谷焼

(加賀繡)

加賀繡は、室町時代初期に、加賀地方への仏教の布教とともに、主に仏前の打敷（うちしき）や僧侶のお袈裟（けさ）など、装飾の技法として京都から伝えられ、藩政時代に入ると、藩主の陣羽織や装飾品などに施され、奥方たちの着物にも用いられるようになった。さらに、友禅染めの発達とともに、染模様を際立たせるために、より高度な技法が求められ、学術文化を重んじ奨励した歴代藩主の手厚い保護により、「加賀の金箔」「加賀の友禅」と並ぶ「加賀の繡」として、独自の発展と完成を遂げた。

その特徴は、絹糸や金糸、銀糸を巧みに使って立体感のある図柄を浮かび上がらせるところにあり、繊細な技術を駆使し、ひと針ひと針丹精につくられ、「ひとつ限りのもの」として喜ばれ珍重されている。また、近年は、さまざまな日常雑貨やタペストリーなどにも加賀繡が活用されている。

また、石川県加賀刺繍協同組合が復元した前田利家の正室まつが繡いをされたと伝えられる利家の陣羽織は、大きな話題となった。陣羽織の復元に伴う制作活動は、糸を草木で染めるところから始まり、前後ともに豪華な加賀繡が施されている。



加賀繡

(金沢仏壇)

金沢では、蓮如上人の布教活動により、各戸での本尊安置を奨励する浄土真宗（一向宗）が庶民の生活に深く根をおろしており、他の地域に比べて仏壇の需要が極めて高まり、それに応えたのが、三代藩主・利常が開いた御細工所に江戸や京都から呼び集められ美術工芸の基礎を築いた名工の流れを汲んだ職人たちである。



金沢仏壇

そもそも仏壇は、寺院の本堂を模したものであり、その制作には、木工をはじめとして、あらゆる工芸技法が駆使されている。特に、金沢では、木地師、塗師、蒔絵師、彫刻師、金具師等の分業体制で制作が行われ、金箔の生産地でもあったことから、金箔をふんだんに使い、伝統工芸の集大成的、荘厳華麗な金沢仏壇が作られるようになった。



作業風景

近年は、生活様式が多様化していることもあり、消費者のデザインによる仏壇や、仏壇と多目的スペースとを組み合わせた回転式の「からくり仏壇」、設置場所や宗派にあわせた新型家具調仏壇も制作され、今の生活にあわせた商品の開発も行われている。また新たに、江戸時代など古くに制作された伝統的な仏壇の写真をデータベース化し、見たい時にすぐに取り出せるようにするといった試みも展開されている。

次に、国の伝統工芸品産業の振興に関する法律には指定されていないが、金沢の代表的な伝統工芸品を、幾つか見ていこう。

(加賀象嵌)

象嵌は刀装具などに用いられる金属加飾法で、武家にとっては欠くことのできない技能であり、前田家においても江戸時代初め、二代藩主・利長が京都金工宗家の後藤琢乗を招聘し、技術の導入を図った。さらに、武家社会の制度的要請として、単にその技を根付かせるだけではなく、加賀藩の金工を司る体制が確立され、金沢で象嵌技術は高度な発展を遂げていった。

特に、加賀象嵌の施された馬具の鐙は、金銀材を打ち込む溝の底部を開口部よりやや彫り広げる平象嵌の技法により、どのような衝動にも剥がれ落ちず、精巧で優美な意匠とあいまって、天下の名声を博した。

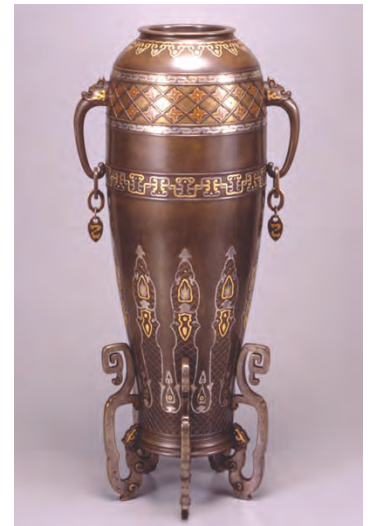
さらに、美術工芸品としての加賀象嵌の評価は国内のみならず、日本が万国博覧会に出品を始めた1871年のウィーン万国博覧会以来、世界的なものとなり、優れた作品は各国の美術館に収蔵されることとなった。



加賀象嵌が施された鐘

例えば、右の写真は加賀象嵌の名工、山川孝次の手によって製作された青銅鑄製、胴、両脇の耳（把手）、五脚からなる花瓶であるが、優れた技法とデザインとが融合した名品で、明治天皇よりアメリカのグラント將軍婦人に贈呈されて、現在ワシントンのスミソニアン博物館に収蔵されている。

初代山川孝次は文政11（1828）年金沢に生まれ、「加賀宗珉」と呼ばれるほどの名工として知られ、明治政府から命じられて、ウィーン万国博覧会に出品する作品を完成させ、1876年フィラデルフィア万国博覧会では「銅器」の出品で受賞している。



金銀象嵌環付花瓶
（きんぎんぞうがんかんつきかびん）

（大樋焼）

1666年、五代藩主・綱紀が京都から招いた茶道裏千家四代・千宗室・仙叟に同道した楽家四代・一入の高弟であった陶工・初代土師長左衛門が伝えた楽焼が大樋焼の始まりである。長左衛門は、近隣に良質な土が見出された大樋村に窯を開き、藩の焼物御用を務め、仙叟の指導の下、力強く雅趣に富んだ造形に渦文や水波紋などの意匠を凝らした侘びを体現する茶道具を創作した。

ロクロを用いずに手捻りによる造形、釉薬が溶けているときに窯から引き出す独特の焼成、そして、京都楽焼の黒焼とも赤焼とも異なり茶の鮮やかな緑を引き立てる飴色の釉薬が大樋焼最大の特色である。

その後大樋焼歴代は代々藩主の御用窯として大樋焼の制作を続けてきた。大樋焼の制作活動は、明治維新後、民間の窯元として生業を立てざるを得なくなったことや、当時の茶道の衰退と重なって、苦難の時期を迎えたが、茶道の復興とともに隆盛を極め、現在は、十代長左衛門（文化功労者・日本芸術院会員）が当主となり、伝統と現代を両立させ、茶道界のみならず一般にも広く親しまれるようになった。今日、江戸時代からの歴史を持つ楽焼は、京都の楽家と金沢の大樋焼だけであり、大樋焼は全国的に高い評価を得ている。



大樋焼

(加賀毛針)

加賀毛針は、加賀藩が、地勢を知るといふ軍政上の理由で、武士だけの特権として奨励していた鮎釣りから製法が確立されていった。すなわち水中で鮎の興味をそそるため、緻密な技巧により、時と場合に見合った虫類の形姿や虹彩を色とりどりの羽毛で表す様々な工夫が施されていったのである。現在では、その繊細な技を生かしたコサージュなど華やかなアクセサリも製作されている。

(加賀水引)

水引は、金封や贈答品に掛け結ばれる日本特有の結びひもであるが、金沢の水引細工の特徴は、折らずにふっくらとさせた形姿の美しさにある。単に包みに装飾的に掛け結ぶ機能に加え、自在な造形素材としての性格も併せ持つのである。婚礼の結納など祭礼行事には欠かせない伝統の技であり、今でも生活の中で息づいている。



加賀毛針



コサージュ



加賀水引

(郷土玩具)

郷土玩具は、その地域の習俗が反映されて、庶民の信仰や縁起が託された愛玩のための細工であるが、手軽な観光土産としての要素も大きく、人気の高いものは産業化して発展してきた。金沢で最も技巧的な郷土玩具の「獅子頭」は、江戸時代、武芸錬磨を兼ねて奨励されてきた獅子舞に用いる巨大な獅子頭のミニチュアであり、桐の白木作りで、角や歯は金箔押し、口中や鼻腔は朱に塗られて豪壮な雰囲気が出ている。さらに牡丹唐草の友禅染胴衣を伴うものは高級感が漂う玩具である。



郷土玩具(獅子頭)



獅子舞

(二俣和紙)

二俣和紙は、金沢市街から山間部に入った二俣地区で江戸時代から藩御用の料紙として作られ、藩の保護下で奉書紙や檀紙等の公用紙を中心に、質量ともに群を抜く加賀の和紙生産地として発展してきた。現在では、高級和紙としての新たな需要もあり、名刺やレターセットなど新たな商品も生まれている。



二俣和紙



二俣和紙

(伝統工芸の特徴)

ここで、金沢の伝統工芸の特徴をまとめると、

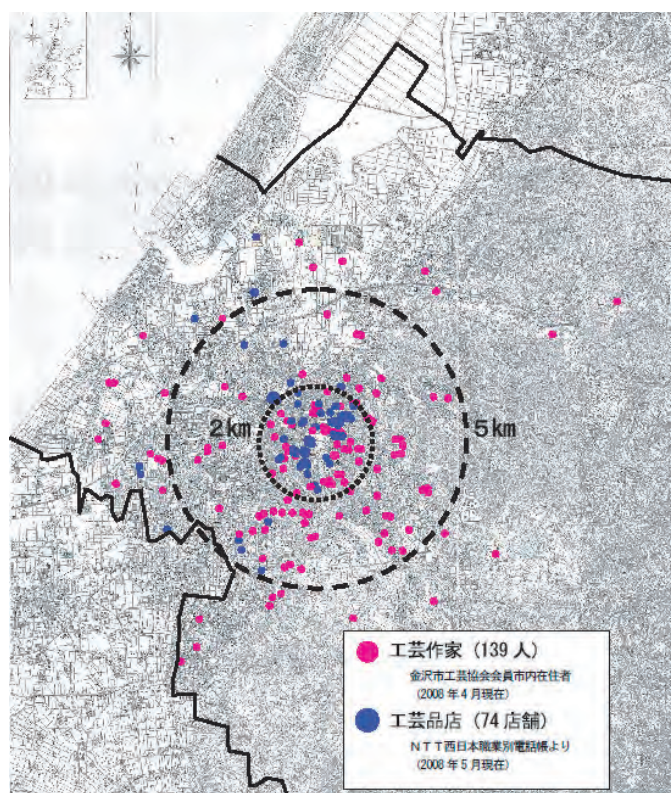
第1に、加賀地域に伝来の素材、技術に、先進地であった京都のデザインや技法などを導入し、融合しつつ、独自の領域を確立してゆき、京都よりも高い評価を受けるに至り、日本を代表する工芸を擁していること、

第2に、加賀・前田藩の支援を受けて、武家文化独特の豪華さや華やかさ、さらには寺内町の歴史を刻んだ町衆の厚い信仰心などを背景とした繊細さの両面をもつ、加賀調のデザインが確立されていること、

第3に、現在に至るまで、市民のくらしの中に工芸品が活かされ、生活の質を高めているのみならず、今日の産業においても、工芸的生産や職人的なものづくりの精神が生かされていること、

の3点に集約される。

また、このような特徴をもった金沢の伝統工芸を支える工芸作家や工芸品店は、次の図に見られるように、金沢城址を中心とした半径約2 kmの旧城下町区域に約6割、半径5 kmまで広げるとその約9割までもが所在しており、市内中心部にまとまりのある分布となっている。



地域の工芸作家・工芸品店



Ⅲ. 現代の工芸

金沢は、京都に次いで多種類の伝統的工芸品産業が継承されている都市であり、確認されている伝統産業は22業種である。これら伝統的工芸品産業に関連する製造業事業所数は約900事業所、従業者数は約3,000人に達する。これは市内の事業所の約20%、従業者数の約6%を占めており、金沢市の一つの基幹産業といえる位置にある。

しかし、少子高齢社会の進展により、伝統的工芸品産業に従事する担い手が減少しているほか、グローバル化、知識情報経済化の進展による生活様式の変容の中で、伝統工芸品に対する消費者の関心が希薄化しているとともに、1990年代初頭のバブル経済の時期に、価格が急上昇し、消費者の心理に伝統工芸品に対する割高感が生まれ、敬遠されたことが影響し、総じて、伝統工芸品の需要が伸び悩んでいる状況にある。

このように、工芸を取り巻く環境が厳しさを増す中で、金沢市では、伝統工芸品の普及・振興をめざし、各種施策を推進するほか、行政と産業界が連携し、伝統的工芸品産業の活性化に向けた取組を実施しているところである。

(1) 工芸の振興政策

(多様な主体による取組)

現在、金沢市は伝統的工芸品産業の普及・振興に向けて、

1. 技術保存・後継者育成事業

伝統産業の技術保存と後継者育成を図るために「金沢市の技と芸の人づくり基金」を設け、その基金を活用し、専門的な知識や技術を習得する研修者を対象に奨励金を交付。特に、希少伝統産業の後継者や障害者または高齢者を雇用する伝統産業事業者に対しては、助成内容を充実し育成を支援。

2. 新製品開発・販路拡張事業

現代生活に適応した新しいスタイルの工芸品の開発と販路拡張を支援するために「金沢ブランド工芸品」の開発費を助成するほか、首都圏における工芸品のアンテナショップを開催するとともに、金箔に関する国内唯一の博物館の移転整備（2010年秋予定）に合わせ、産地支援や商品開発コーディネート、アーカイブ機能を有する「金沢箔技術振興研究所」を新たに開設。

3. 海外展開支援事業

若手工芸家や職人の海外展開を促進するため、工芸に関する知識や技術を習得する海外への留学や、海外での展覧会・個展の開催を支援。

4. 伝統産業貢献者表彰制度

長年にわたり、技術の向上や後継者の育成・指導に貢献のあった職人を表彰。

5. 工房開設奨励事業

山間地の空き家等を工芸家の創作活動の場として活用するため、里山工房群を整備するほか、中心市街地における空き店舗等を活用した工房の開設を支援。

6. 金沢工芸普及推進協会の設立

工芸品の普及啓発のための情報発信や、新製品の開発、販路の拡大を目的に、業界団体・作家・経済団体・金沢市により2002年設立。伝統工芸品などを展示・販売するアンテナショップの運営をはじめ、啓発情報誌の発行、ホームページの運営等を実施。

などの取組をすすめている。

また、市制100周年を記念し、1989年に「金沢工芸大賞コンペティション」を開始し、1999年の第6回開催からは、工芸への新しい提案を国内外から金沢の伝統に吹き込むとともに、伝統の技に新しい創造を付加した新たな工芸を広く世界に向けて発信するために、同事業は、「世界工芸コンペティション・金沢」として改組され、広く世界から作品を募集して、毎回、国内と50を超える国と地域から1000点を越える作品が寄せられる世界的な公募展へと発展している。

さらに、こうした行政による工芸振興政策のみならず、職人や工芸作家自らが立ち上がっている。例えば、衰退傾向が続いていた加賀繡の業界では、職人たちの協同組合が作られ、後継者養成のための専門塾や教室を開催して、従業者数を増加させている。また、金沢市工芸協会では、その前身である金沢市意匠図案研究会が、1933年に開催した第1回作品展をはじめとし、その後、名称を「金沢市工芸展覧会」、「金沢市創作工芸展」へと変えて、1984年の第40回からは「金沢市工芸展」として、長きにわたり歴史ある作品展を開催している。このような金沢市工芸協会の取組や若手作家の熱意が実り、金沢市は1995年9月26日、以下のような「世界工芸都市宣言」を行った。

「私たちのまち金沢は、香り高い伝統文化と四季折々の美しい自然の中で、多くの名工を輩出し、世界に誇る幾多の手技による名品を生み出すとともに、市民生活の中に格調高い技と美に対する豊かな感性をはぐくんできた。

私たちすべての市民は、

- 1 美しい伝統的・文化的遺産と環境の保全
- 1 伝統的で高度な技法・技術の継承と後継者の育成
- 1 未来に向けた生き生きとした創造精神の発揚
- 1 新しい独自の個性を持った創作活動の支援

を基本に、さらなる新しい「ものづくりのこころ」を世界に向け継承、発信していくことを宣言する。」

この宣言は、決して行政や工芸作家たちだけのものではない。日常生活の中に工芸が息づいている金沢というまちにおける、市民一人ひとりの宣言である。そして、これを機に、1997年からは、工芸の伝統的な技術や職人の心意気を、過去から現在へ受け継ぎ、発展させ、未来へと継承させていくことを企図して、「世界工芸都市会議」が開催されている。その第1回「世界工芸都市会議'97」では、フィレンツェ、コペンハーゲン、イスタンブール、京都から、それぞれの政策担当者と職人が招かれ、伝統工芸の後継者養成、市場開発を主なテーマとして議論が交わされた。1999年の第2回では、ヴェネチア、ボローニャ、ジュネーブが参加するとともに、ボローニャの金細工マエストロも招待され、加賀象嵌の若手作家と交流しつつ、指導を行っている。

さらに、この世界工芸都市会議は、2003年から「世界工芸コンペティション・金沢」とともに、「金沢・世界工芸フォーラム」として開催されており、海外からのゲストを迎えたパネルディスカッションや特別招待展、ワークショップなどを行い、金沢の歴史ある工芸が21世紀の世界においてどのような可能性を持つのかを模索し、世界的な視野から金沢における工芸の振興を図っている。

また、個別の工芸分野においても、世界で唯一のガラスを主題とした国際公募展である「国際ガラス展」、漆の新しい可能性を探る「国際漆展」などが1980年代から、行政と民間の協力により開催されている。

こうした新たな技術の応用や新しい製品開発、デザイン開発に向けた試みは、工芸の分野だけにとどまらず、2004年6月の金沢ファッション産業都市宣言を踏まえ、「ライフ&ファッション金沢ウィーク（愛称：かなざわごのみ）」の開催へと発展している。2006年10月に開催された第1回においては、新感覚の加賀友禅や織物、工芸などが出品される一方、加賀宝生と現代音楽とのコラボレーションなどの新たなパフォーマンスが演じられた。また、翌年の第2回では、特別企画事業として開催された金沢美術工芸大学の黒川雅之教授による伝統工芸のデザインを再編集した試みが話題を集めた。この試みは、金沢の工芸が持つ伝統的美意識と文化、優れた技術を取り出し、現代の世界の美意識に合わせて再編集しようとするもので、ここには金沢固有の評価軸を探り、再構築しようという意図が込められている。



ライフ&ファッション金沢ウィーク(愛称:かなざわごのみ)

さらに、金沢市では、国際連合大学、石川県と共同し、科学・文化・技術の各分野で国際協力を発展促進させるため、1996年、「いしかわ国際協力研究機構」を設置している。この機構では、1997年に国際協力シンポジウム「伝統工芸と環境・地域振興の可能性を求めて」を開催し、世界工芸協議会会長オマール・アミネ・ベナブダラー氏や国際伝統工芸振興事業団事務局長ドミニク・ブシャー氏をはじめ、インドネシアやタイ、インドなどから研究者らを招き、伝統工芸の振興と環境の改善などについて議論を交わし、その結果を「金沢アピール」として発表しており、それ以降、持続可能な都市の発展における伝統工芸の役割に関するシンポジウムや職人交流を継続して実施し、発展途上国における工芸の振興や人材育成に関する積極的な支援を進め、2008年には、国内初となる「国際連合大学高等研究所 いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット」に発展し、地球的視野で環境問題の改善に貢献するための研究活動に取り組んでいるのである。

今後、本ユニットとのさらなる連携を図るとともに、2010年に開催される「金沢・世界工芸トリエンナーレ」に、特に発展途上国の創造都市ネットワーク登録都市の工芸作家を招聘するなど、世界の創造都市との交流に向けて、活動を強化していきたいと考えている。

(現代工芸の新たな可能性)

現代工芸の技術を応用した新たな可能性も芽生えている。金沢市の補助事業を活用したブランド工芸品開発のため、江戸時代から続く加賀友禅の染元・千紅では、婚礼の9割以上が洋風化する中、加賀友禅の色彩、文様を取り入れたウェディングドレスを開発した。加賀友禅の新しい可能性を切り拓き、ホテル・旅館等での販路開拓を目指している。また、九谷焼窯元の鑄木商舗では、近年のワインブームに対応し、ボルドーやブルゴーニュ産のワインを楽しむことができる機能を備えた世界にも通用する九谷焼とガラスのコラボレーションによるワイングラスを開発した。インターナショナルギフトショー（東京）やメゾンドオブジェ（パリ）にも出展し、販路開拓を図っている。さらに、うるし・漆器の製造販売を手掛ける老舗の能作では、覆輪技法などの伝統技術を活かしつつ、三次元CGを活用し、現代の生活様式に合った金沢漆器の飾り小箱の企画製造と販路開拓事業に取り組んでいる。



ワイングラス(九谷焼)



ウェディングドレス(加賀友禅)



飾り小箱(金沢漆器)

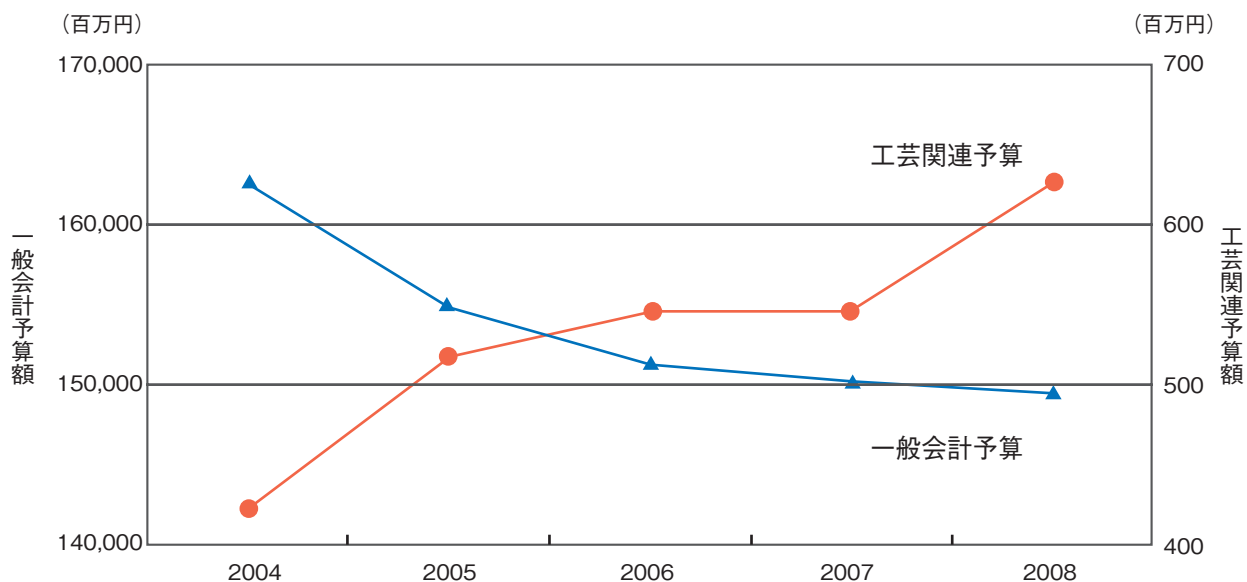
一方、工芸技術の応用が新たな産業として、産業界に息吹を吹き込んでいる企業もある。金箔製造業のカタニ産業では、箔転写技術を応用し、携帯電話や化粧品容器、自動車部品などの工業製品への表面加飾に関するあらゆる製品を手掛けており、加飾転写業界のリーダーとして、世界に技術を提供している。

このような中、金沢市では、金箔の応用範囲を広げる研究とともに商品開発の可能性を高めるための金箔技術振興研究所、全国的に和装離れが深刻化する中で加賀友禅の技術支援や販路拡大を目指す研究機関・加賀友禅技術振興研究所の設立に向けた準備を進めている。

また、2009年に創業250周年を迎える英国の陶磁器メーカーのウェッジウッド社では、記念プロジェクト“ジャパネスク”で新たな表現を探求するため、金沢の陶芸家、中村卓夫氏とのコラボレーションを試みるなど、海外ブランドと工芸業界との提携も進められている。

以上のように、金沢市が工芸を重要視し、産業界と協力しながら多面的な工芸産業振興に取り組んでいることは、予算面にも表れており、近年、金沢市の一般会計予算額がマイナス傾向となっている中で、工芸関連予算についてはプラス傾向が続いている。

工芸関連予算額の推移



(2) 工芸振興の基盤

金沢市においては、工芸人材の養成や工芸に関連する文化政策等にも力を入れている。以下、大学等の人材養成機関、新しい文化を創出する拠点や工芸を育む環境といった工芸振興の基盤に関する取組について見ていこう。

(人材養成機関)

工芸人材の養成に、行政が果たした役割は大きい。

1876年には、江戸時代から蓄積された様々な工芸に関する技能の保存、育成、革新を目的として国内最初の公設試験場である石川県勸業試験場（現在の石川県工業試験場）が設置され、さらに、1887年には日本で最も歴史のある工業高等学校である金沢工業学校（現在の石川県立工業高等学校）が設置されている。

金沢工業学校は、金沢に美術学校を設置しようという市民の要請運動を受けて、明治政府から九谷焼の指導のために派遣されていた画家であり教育者であった納富介次郎が創立した工業学校である。納富は、明治政府の意向を受けて日本各地を回って専門学校の設立を働きかけるが、江戸時代より工芸が盛んであった金沢を選び、設立の目的を美術工芸の近代化を通し地域振興に貢献することとした。一方、高級な美術工芸ではマーケットが限られるため、九谷焼などの伝統工芸に工業デザインを導入することで、美術工芸を世界に通じる産業に高めようという思いから、美術学校ではなく、日本最初の工業デザイン教育を志向する工業学校として開校していることが意義深く、これはまさに、「和魂洋才」とでも言えるような、和と洋の融合の試みであった。

その後、1920年には金沢高等工業学校（現在の金沢大学工学部）、1928年には金沢市立工業学校（現在の金沢市立工業高等学校）が設立されており、金沢は、地方においては屈指の多様な教育・研究機関が集積する都市となり、それらが地域固有の伝統工芸に近代的な工業デザインを融合しつつ、人材育成を通して製造業の内発的発展に大きな役割を果たしてきたのである。

このように、明治維新後、工芸都市・金沢において生じた、職人的なものづくりの精神と近代的な工業デザインとを融合する創造的な環境は、あたかも加賀藩の御細工所のようにでもあり、創造産業の発展という観点から見過ごせない重要な要素である。また、このような歴史的背景によって、金沢市には、デザイン分野の産業や人材も相対的に充実しており、伝統工芸の担い手の中にも、現代的なデザイナーが生まれてくる土壌がある。

特筆されるのは、第2次世界大戦終戦後、わずか1年も経たずに、金沢市が美術工芸の振興を市制の大きな柱として、市立の美術工芸大学を設立し、著名な工芸作家を教授に招き、後継者の育成に努めていることである。これは、戦前からの市民による美術大学設立に向けた運動の結実であり、また、まさに、学術文化を奨励し、平和を希求する金沢という都市の精神風土の発露と言えよう。設立について審議がなされた市議会で当時の金沢市長は「この焼け野原の日本で平和の息吹、新しい芽を少しでも出していかなければならないのではないか。そういう役割をこの地が帯びているということを痛感いたしているのです」と述べている。

金沢美術工芸大学は、「美の創造を通じて人類の平和に貢献する」ことを理想に掲げ、工芸美術の伝統の継承と保存育成をめざし、1946年に金沢美術工芸専門学校として発足し、1950年には美術科と工芸科からなる金沢美術工芸短期大学への昇格を経て、1955年、4年制大学として設立された。設立に当たっては、美術学科に加え産業美術学科を新設し、すでに日本の工業デザイン界を牽引する立場となっていた柳宗理を教授として迎え、本格的な工業デザイン教育に乗り出したのである。その後、1965年には、産業学科に工芸・繊維デザイン専攻、1986年には、美術学科に芸術学専攻を設置し、1996年には学科再編により美術科、デザイン科、工芸科の3学科制となり、現在に至っている。

学内には、教育研究センター、産学連携センター、地域連携センター、国際交流センターからなる研究機関として、造形芸術総合研究所が設置されており、伝統工芸聴講生制度を設け、漆、染色、陶芸、彫鍛金の分野で、工芸を継承・発展させる人材を育成し、地元産業界との連携強化を図るなど地域貢献を果たす一方で、工芸を介した国際貢献にも積極的に取り組んでいる。研究所では、アジア諸国に残された古典的な工芸技術や素材、意匠の記録・保存・継承と、金沢の高度な工芸を交流させることで、双方にとって有益な学術や産業の研究と人材の育成に取り組むとともに、技術・人材支援を行うことにより、基盤技術の発展と製品の完成度の向上を図り、アジア諸国における産業の発展と後継者の育成をめざしている。これまでも、工芸科の修士課程や博士課程で学んだ留学生が、帰国後には大学等の指導者として活躍するほか、工芸科の教員がミャンマーに出向き、染織技術の復活や新製品の開発に尽力している。

また、国際交流事業として、金沢市の姉妹都市であるナンシー（フランス）、アントワープ（ベルギー）の両国立美術大学をはじめ、イェーテボリ大学ヴァランド芸術学院（スウェーデン）、清華大学美術学院（中国）など、海外の大学等と活発な交流を続け、また、1998年からは国内の大学で初めて、アーティスト・イン・レジデンス制度を活用し、世界の第一線で高い評価を得ている芸術家を招聘し、先端的かつ国際的な芸術の感性と技術の向上を図っている。

さらに、重要無形文化財保持者（人間国宝）である徳田八十吉（正彦）（彩釉磁器）、中川衛（彫金）は、金沢美術工芸大学の卒業生であると同時に、同大学の教授となつて、後継者の育成・指導にあたっているほか、ソニーのプレイステーションやVAIOなどのヒット商品のデザインを担当した後藤禎祐、任天堂のスーパーマリオブラザーズなどを生み出し、フランスのレジオン・ドヌール勲章を受賞するなど国際的に活躍している宮本茂も卒業生であり、金沢美術工芸大学は、美術工芸分野のみならず、創造性あふれる人材を多く輩出している。



金沢美術工芸大学



留学生を交えた授業の様子

また、金沢市は、1996年に「金沢職人大学校」を開設した。これは金沢が受け継いできた高度な職人技能を守り伝えるために、すでに基本的技能を身につけている30歳から50歳までの職人を対象とした研修施設であり、本科として、大工科、石工科、左官科、瓦科、造園科、豊科、板金科、建具科、表具科の9コースが設置され、各業界から推薦を受けた中堅の職人を対象に、3年間の実習を行うこととしている。さらに、1999年に設けられた修復専攻科では、本科卒業生、本科講師、市技術職員が3年間の実習（月4回）を行い、実際に市内の武家屋敷や町家、茶室などの修復を手がけ、金沢の伝統的なまちなみの保全にも取り組んでいる。



金沢職人大学校



授業の様子

この他、一般市民を対象とした工芸の研修・養成事業を重視していることも特徴的である。

金沢市が市制100周年を記念して1989年に設立した「金沢卯辰山工芸工房」では、陶芸、漆芸、染、金工、ガラス工芸の各工房で3年間の研修を行い、研修者には奨学金を支給し、後継者養成技術指導を図るとともに、修了後も、希望者には市内にアトリエを提供し、製作した作品を都心で販売できる工芸ショップも開設するなど非常にきめ細かい支援策をとっており、海外からの研修者も延べ10名を数える。同時に、一般市民向けの研修講座も開設しており、卯辰山工芸工房は、かつてこの地に設置された御細工所の精神を現代に生かしたものと評価されている。



金沢卯辰山工芸工房



海外からの研修生

このような人材養成に関する取組は、将来を担う子どもたちをも対象に展開されており、2002年、子どもの頃からものづくりの楽しさを体験することを通じて、職人技への興味喚起を図る「金沢職人大学校 子どもマイスターズスクール」を開講し、2008年には、工芸の素質、素養を磨き、将来の一流の工芸家の発掘と育成をめざす「金沢工芸子ども塾」を新たに開講している。さらに、金沢市では、地域固有の文化を継承するため、2002年に「加賀宝生子ども塾」を、2005年には「金沢素雛子ども塾」を開講している。



子どもマイスターズスクール



金沢工芸子ども塾



金沢素囃子子ども塾



加賀宝生子子ども塾

(工芸に関連する諸施策)

人材の養成に向けた取組に加え、金沢市では、工芸作家の感性を磨き、同時に工芸を受け入れる土壌をつくり出す様々な文化政策が展開されているが、ここでは、その特徴的なものを2点見ていこう。

第1に、世界遺産登録への取組が挙げられる。

高度成長期における都市開発が進む中で、国は1966年に「古都保存法」を制定し、古都における歴史的風土の保存を進めた。しかし、この法律は奈良市、京都市、鎌倉市のみを対象としたものであったため、金沢市では、1968年に「金沢市伝統環

境保存条例」を制定した。市独自の条例を制定して市民の協力を得ながら市街地の環境を守っていかうとする取組の第一歩であり、ここから条例によるまちづくりが本格化する。平成元年には景観形成基準を定めた「金沢市景観条例」として同条例を改正した。さらに、歴史的風情のあるちょっとしたまちなみを残す「こまちなみ保存条例」、市内を網の目のように流れる総延長150kmに及ぶ用水を後代に継承する「用水保全条例」、住民による自主的なまちづくりの仕組みを定めた「まちづくり条例」など、次々とユニークな条例を制定し、「保存と開発の調和」によるまちづくりを推進している。

世界遺産登録への取組は、このようにして、歴史文化資産を保全しつつ、国に先駆けて行ってきた金沢市の条例によるまちづくりに立脚したものであり、金沢が保持し続けてきた近世城下町の特徴的な都市構造とその上に残る近世・近代の多くの文化遺産群を、「城下町金沢の文化遺産群と文化的景観」として位置づけ、工芸をはじめとする伝統的産業技術や無形の芸術、培われてきた様々な伝統文化にも触れながらその普遍的な価値を明らかにし、将来に向けて保存していくための方向性を提案しているものである。

2点目は、多様な文化との融合である。

一例として、加賀宝生などの伝統芸能とともに、伝統工芸である琴や三弦を用いた日本古来の邦楽文化が盛んな金沢において、あえて西洋音楽文化との融合を試みた「オーケストラ・アンサンブル金沢」の積極的な活動が挙げられる。オーケストラ・



オーケストラ・アンサンブル金沢と素囃子のジョイントコンサート

アンサンブル金沢は、石川県と金沢市が1988年に、日本を代表する指揮者であった故岩城宏之氏の協力を得て設立したものであり、日本初となる室内楽中心のプロのオーケストラ（楽団員40名の中規模編成）である。モーツァルトの交響曲全曲演奏や武満徹、黛敏郎の現代音楽などに意欲的に取り組み、国際的評価を高めている。また、加賀友禅の製作・販売を行う民間企業からの寄贈により、女性団員が加賀友禅の柄を施したドレスを着用するなど、伝統工芸が盛んな土地柄におけるオーケストラを意識した活動を行うとともに、芸妓による金沢素囃子との共演を行うなど、伝統の中から新たな創造を生み出す試みにも挑戦している。

（新しい文化創出の拠点）

近年、注目される新しい文化運動の拠点が金沢に生まれている。かつて繊維産地の象徴的な建物であった旧大和紡績金沢工場の煉瓦造りの倉庫群が改造され、1996年に「金沢市民芸術村」として生まれ変わったのである。文化を担う若人たちが集い、新たな市民芸術の創造活動を行い、演劇・音楽等の練習および成果発表する場として利用に供し、もって市民の芸術文化に寄与するという設置目的のもと、これまで金沢になかった新しい文化が創造されている。

この芸術村には、ドラマ工房、ミュージック工房、マルチ工房（当初はエコライフ工房）、アート工房として一般市民が自由に使用できる創造空間が設けられており、芸術村を管理する金沢市は利用者代表と話し合い、「1日24時間、1年365日」自由に市民の創造活動に公共施設を開放することとしたのである。運営するのは、4つの工房毎に選ばれた2人ずつ合計8人のディレクターたちで、施設利用の活性化、独自事業の企画立案、そして利用者間の調整などを自主的に行うこととされており、全国的にも注目される施設である。



演劇の練習風景

さらに、2004年10月9日、学校施設の郊外への移転によって生じた都心部の跡地に、丸い円盤のような独特の概観をもつ金沢21世紀美術館が出現した。従来の美術館のイメージを覆し、市民が「まるびい」と呼ぶこの美術館は、1980年以降のコンテンポラリーアートを中心とした世界の芸術作品を収集・展示するとともに、著名なアーティストを招いた公開製作などを通じて、地元の伝統工芸・伝統芸能と現代アートの融合を目的に建設された。

一般の現代美術館においては、工芸というジャンルを扱うことがないが、この美術館では、開設準備の過程で、キュレーターと工芸作家たちとの間で熱心な議論が交わされて、工芸であっても現代アートとみなせる作品は積極的に収集することとなり、美術館の壁面の一部には友禅模様のオブジェが飾られることになった。



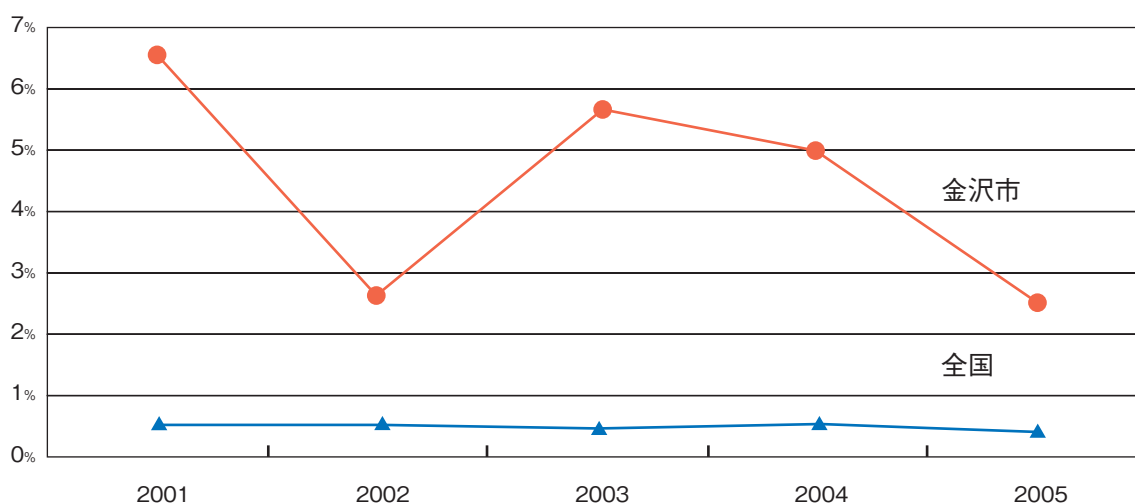
金沢21世紀美術館 ミュージアム・クルーズ

「芸術は創造性あふれる将来の人材を養成する未来への投資」であるとの、蓑豊初代館長の考えにより始まった、毎年市内の小学校4年生を全員招待するという「ミュージアム・クルーズ」事業の効果もあり、開館して1年で、市内人口を3倍ほど上回る157万人の入場者を数え、その経済波及効果（建設投資を含む）は300億円を超過している。

金沢市は、さらにこの美術館との連携を図りながら、歴史ある伝統とデザイン分野を融合させた新しいものづくりを進め、世界に「金沢ブランド」を創出していくことをめざした金沢ファッション産業都市宣言の実践機関として、2005年に金沢ファッション産業創造機構を立ち上げ、歴史的に培ってきた伝統工芸や伝統芸能とコンテンポラリーアートとの融合の中から新しい地域産業を創出する事業を開始している。

以上のように、金沢市の文化政策は多面的で先進的な内容を持っており、文化関連経費（文化芸術・文化財）の歳出決算額に占める割合は、日本の自治体の平均が1%未満であるのに対し、金沢市では約3~6%を占めていることにも示されている。

文化関係経費の推移





IV. 金沢の 創造経済

(1) 創造経済における工芸の役割

金沢の創造経済とは、すでに述べたとおり、江戸時代からの工芸的生産システムの発展の上に築かれてきた独自の文化的生産システムによるものであり、金沢の現代産業には工芸や職人的なものづくりの精神が様々な影響を与えている。あらためて、この文化的生産システムについて、事例を挙げながら示していきたい。

(地域内発型企業の発展)

明治維新以降、金沢の機械工業の発展の基礎となったのは江戸時代に加賀藩が勧めた工芸であった。また、江戸時代後期に普及した「からくり」などの名工たちの中からも、すでに見た津田駒工業のように、繊維産業の興隆と結びついた自動織機の開発などで新しい道を開くパイオニアが登場した。江戸時代の職人の技能やノウハウが革新されて、近代工業に生かされ発展していったのである。

さらに、工芸的生産に宿る職人氣質とその発展がもたらした地域技術の集積は、新しい都市型産業にも引き継がれ、ハイテクを駆使する職人たちに支えられたハイテク産業こそが現代の金沢経済の主役となっている。同時に、大量生産とは異なり、消費者のニーズにきめ細やかに応じる多品種・少量生産やハイタッチな製品を強みとするニッチトップ企業が数多く存在している。

そのような金沢のハイテクベンチャー企業の代表は、パーソナル・コンピュータの周辺機器メーカーとして全国ブランドとなった株式会社アイ・オー・データ機器である。創業者は、国産コンピュータ会社の草分けであった地元企業に就職後、金沢工業大学でコンピュータの開発研究に携わったのち、1976年に自宅ガレージを工場として会社を設立し、地域の基幹産業である繊維工場の稼動監視システムを開発することにより業容を整えた。1984年に独自の方式で増設RAMボードの開発・販売を開始するや、急激に需要が殺到し、オリジナル技術であるIOバンク方式は、RAMボードの「標準規格」となり、市場のトップシェアを占めるようになった。パソコンの普及とともに、開発されるソフトウェアとのメモリー容量のギャップに気づき、周辺機器として職人氣質そのままに大手メーカーの入り込めないすき間に巧みに迅速に参入して成功を収めたのである。現在、主力商品は、増設メモリーボード、ストレージ、液晶ディスプレイとなっているが、近年はデータとして記録した音楽を再生するMP3プレーヤー、さらにネットワークメディアプレーヤーやワンセグチューナーなどを開発し新分野にも製品群を広げている。

また、繊維工業関連からファッション・ユニフォームという分野に進出した株式会社ヤギコーポレーションは、カタログ販売を武器に業績を伸ばし、自社ブランド製品を開発して、業界のトップシェア企業となっている。同社は、金沢美術工芸大学で工業デザインを学び、最初に就職した電機メーカーでカタログ販売を経験し、その将来性を予見した経営者のもと、ユニフォームという安定した製品に着目し、すき間産業に特化して、そのファッション化、ハイタッチ化により、飛躍的な発展を遂げた。さらに、職人的なものづくりの精神とハイテク技術を融合させ、ユニフォーム業界で初めてデザインから裁断までをコンピュータで一貫管理するCAD/CAMシステムを導入するとともに、多品種・小ロット・短サイクル化に対応できるフレキシブルな物流システムを構築している。また、使用済みの製品を回収して、再生利用するリサイクル方式をとり入れるとともに、ユニバーサルデザインを導入して老人介護や障害者向けの製品開発にもいち早く取り組んでいる。

伝統的な食文化を支えてきた金沢独自の食品産業群やその関連企業にも伝統工芸で培われた職人氣質が息づいている。

高度成長期には大量生産、大量販売を展開した酒造メーカーが、その全国シェアを高めた一方で、質的低下をきたし消費者の日本酒離れをもたらしてしまった。これに対して、創業以来380年の伝統と石川県の酒造業界でナンバー1の実績を持つ金沢の福光屋は、自造酒主力のオリジナル化により質を維持し、多品種・少量生産方式で、消費者のニーズに対応した多様な新製品を生み出して好評を博した。さらに、同社は伝統の味を継承しつつ、伝統を革新する戦略をも展開しており、全製品純米化を成し遂げるとともに、コンセプトを明確にした複数の銘柄により消費行動へ積極的にアプローチを図る「マルチブランド」政策を展開している。

このように、工芸におけるものづくり精神は、酒造りにも生きており、大量生産ではない丁寧な手仕事として、伝統の上に革新的な技術を加えているのである。この職人技術に富み、イノベーションを得意とする企業精神は、酒造りにとどまるものではなく、域内の他の産業にも共通したものである。

ボトリングシステムの全国トップシェアを誇り、金沢のハイテク分野の中核企業となった澁谷工業株式会社は、もともと醸造用機械を製作しており、伝統産業が育てたメカトロ産業であるといってもよい。同社は、自動ボトリングシステムの開発に乗り出し、ユーザー毎に仕様の異なる文字通り「一品料理」の仕事に「金沢の職人気質の伝統」を生かすことによって、現在は、この分野における国内市場の約60%のシェアを占めている。新分野への進出も意欲的で、人工透析機のOEM生産を軌道に乗せ、事業所向け廃棄物処理プラントも試作から量産段階に移り、蓄積した技術を土台に環境、医療分野への新展開をめざしている。



澁谷工業(株) 自動ボトリングシステム

さらに、多色刷りで金付けまでの付加価値の高い印刷物である清酒ラベルに着目し、金沢の地酒メーカーのラベル印刷を手がけると、これによって得たデザイン性と技術を活用して、全国の約50%のラベル印刷を受注する業界トップ企業となっているのが高桑美術印刷株式会社である。現在、同社は、包装・パッケージからマーケティングまで総合的な営業を展開し、さらに、企画開発部門を設置し、コンピュータ・ガイドブックの印刷などデザイン性・美術性のある印刷物を作り、一層の高付加価値化をめざしている。また、1995年度からは石川県の伝統工芸・芸能をデジタルコンテンツで記録保存するデジタルアーカイブ「新石川情報書府」事業に参画し、高精細画像とデザイン力で評価を高めている。



高桑美術印刷(株) ラベル印刷

この他にも、多品種少量生産で、文字通り「ハイテク時代の職人的生産」のリーダーとして活躍している多くのメーカーがそれぞれの分野で全国のトップシェアを誇っている。例えば、コンベア機械の株式会社石野製作所は1974年に回転寿司コンベアの生産を開始すると、自動給茶装置の開発や寿司ロボットの開発で業界のトップメーカーとなり、同社の自動給茶装置付き寿司コンベア機は、柔軟な発想と確かな技術により、国内外でシェア60%を占めている。

このように金沢に宿る工芸の職人氣質と結びついて発展してきた食品関連機械工業は、地元のソフトハウスやシステムハウスのベンチャー企業に、さらなる発展の可能性を切り開いている。



(株)石野製作所
自動給茶装置付き寿司コンベア機

そして、これらの企業が有機的に結びついて発展してきたことが、金沢の創造経済の大きな特長である。つまり、繊維工業と繊維機械工業が相互に支え合いながら、金属や縫製、印刷などの都市型工業が地元中小企業の手で発展し、さらに、その技術やノウハウが、ハイテクを駆使した近代産業に継承され、多様なニッチトップ企業が輩出されてきた。例えば、先述のとおり、アイ・オー・データ機器は、地域内発型の有力オフィス・コンピューター・メーカーである株式会社PFUからのスピンアウト組で、金沢の基幹産業である繊維工場のシステム開発から発展し、パソコン周辺機器の分野で市場のトップを占めるようになった。このような域内企業の有機的な結びつきが、それぞれの産業が相乗効果を生み出すとともに、新たな分野への転換と産業構造の多角化、ひいては地域経済の安定を導いてきた。さらに、この地域内発型企業の発展力が、外来型の大規模工業開発を抑制し、産業構造や都市構造の急激な転換を回避したことにより、地域外から稼いだ所得が域内で循環することとなり、これが新たな文化的投資と文化的消費に向かっているのである。実際、金沢の卸売・小売りをあわせた人口一人当たりの商品販売額は、全国平均の約4.2百万円に対し、その1.5倍の約6.5百万円となっており、域内取引がいかに旺盛になされているかがうかがえる。

(文化的投資・消費)

金沢では、行政による文化政策のみならず、様々な民間による文化的投資が積極的になされている。

そのような取組の先頭に立つ若手経営者らは、地域内発型イベントとして全国的に評価の高い「フードピア金沢」をプロデュースしている。全国から文化人が招かれ、地域の人々との交流の機会を生み出している。イベントでは、金沢の食文化のみならず、美術・工芸や現代アート等に関する様々な議論が繰り広げられる。毎年食材の豊富な冬に開催され、全国から集まった文化人・知識人達の情報発信力でフードピアは成功をおさめ、冬枯れの時期に観光客を増加させているだけでなく、金沢経済界の地域アイデンティティを呼び覚まし、活性化するという経済効果をもたらしている。まさに、「文化が経済活動をリードするイベント」である。

その他の企業も文化的投資に積極的に取り組んでおり、工芸の支援に積極的に取り組んでいる中村酒造は、先代の社長が有する家屋と美術工芸品を金沢市へ寄付し、金沢市立中村記念美術館の礎とした。

また、江戸時代からの歴史を持つ大野の醤油業者たちは、地元の商工会を中心に使われなくなった醤油蔵を活用したまちづくりの運動を展開している。1998年に手始めに空き蔵をギャラリーと喫茶店に模様替えした「もろみ蔵」を開館し、2年後には二つ目の空き蔵を「創作工房oxydol」に改装し、金沢美術工芸大学を卒業した若手アーティスト3人を招いた。醤油が染み込んで濃い茶色に輝く太い柱や梁がアーティストの創作意欲を刺激し、同時に地域住民との交流の場が広がっている。また、江戸時代末期に大野で活躍した家具や机、木箱などの生活用品を作る職人であったからくりの名工・万能の才人、大野弁吉を記念する「大野からくり記念館」を建設するなど、地域文化の伝承に努めている。

さらに、地域の老舗が、自発的に地域の伝統文化の継承や活性化を企図して、加賀友禅の生産行程である友禅流しなどが披露される催事、浅野川園遊会をプロデュースしている。毎年春、浅野川沿いに繰り広げられる園遊会は、すでに20年以上の歴史を持ち、市民に親しまれる春の催しとして定着している。

他方、消費の面からも、文化性や芸術性に富んだ財やサービスを楽しむ消費者によって、消費市場の高質化が図られ、文化的生産を喚起している。

これらは指標にも表れており、金沢の人口一人当たりの課税対象所得額が、全国の自治体平均と同じ約1.4百万円であるのに対し、人口一人当たりの小売業の年間商品販売額は全国平均のおよそ1.3倍の約1.3百万円となっている。これは消費者所得が同一水準であるにもかかわらず、商品販売額が全国より高くなっているということであり、商品の高質化がうかがえる。

さらに、高い文化性と芸術性を求める金沢の高質な消費市場で成功を取めた催しのひとつとして、「ラ・フォル・ジュルネ金沢『熱狂の日』音楽祭2008」が挙げられる。「ラ・フォル・ジュルネ」は、毎年、ナントで開催されるフランス最大のクラシック音楽の祭典で、これまでにフランス国外の都市では、ポルトガルのリスボン（2000年～）、スペインのビルバオ（2002年～）、東京（2005年～）が開催地となってきた。2008年4月、金沢がこれに加わり、「ベートーヴェンと仲間たち」をテーマに3日間にわたって開催され、フランスやドイツ、スペインなど世界各国から一流の音楽家が集い、予想をはるかに上回る約8万5千人の聴衆が訪れている。



ラ・フォル・ジュルネ金沢
『熱狂の日』音楽祭2008

（新たな創造産業の展開）

このような文化的生産システムの中で、従来のハイテク産業やメカトロ産業に加え、コンテンツ産業などの新たな創造産業が生まれてきている。一例として、高桑美術印刷は、近年、ホームページ作成やBSデジタル放送の番組企画・作成事業を推進するため、メディアラボとクリエイティブラボを創設し、最新型の映像編集システムを導入・本格稼働させており、マルチメディア・コンテンツ分野にも本格的に進出した。

また、民間企業と行政が一体となり、デジタルネットワーク社会の中で、新しい文化価値を創造するために、デジタルクリエイターの祭典、「eAT KANAZAWA（イート金沢）」が1997年から開催されている。毎年、世界からエレクトロニックアートの第一人者を迎え、フォーラムやアワード、セミナー等を行っており、言語や国境を越えて様々な人が金沢の地に集い、交流することにより、デジタル分野はもちろん、伝統工芸をはじめとする地場産業と先端技術のコラボレーションによる新産業の発展をもたらしている。

(2) 官民一体となった創造都市への取組

金沢市はすでに、経済界と市民、行政が手を携えて、官民一体となった創造都市への取組を進めている。

なかでも、金沢経済同友会が市民に呼びかけて開始した金沢創造都市会議において、金沢の創造都市戦略は討論され、練り上げられてきた。この会議は21世紀の都市のあり方をグローバルな視野から探求し、新しい都市政策の形成とそのための実験の場を金沢が提供するという意気込みで、2001年から隔年開催で開始された斬新なスタイルの都市会議である。

1997年、金沢創造都市会議は創立40周年を迎えた金沢経済同友会の記念事業として始まるのであるが、経済人が自らの事業の利害を超え、長期的視野から都市政策を構想するものとして、ユニークで高いレベルの内容のものであり、準備段階を含めると、すでに10年以上の歴史がある。

その第1回は2001年、「記憶に学ぶ」をテーマに都市としての金沢の歴史・伝統を振り返り、「都市の記憶と人間の創造力」について考察を行い、その際立った都市の個性を新世紀に引継ぎ、さらに洗練させる目的で「金沢学会」の設立が提唱された。

2002年にはそれを受けて第1回金沢学会が開かれ、「美しい金沢」を理念とする都市再生プランが提案され、その社会実験を検証する場として創造都市会議と金沢学会をそれぞれ、隔年開催10年間継続することが確認された。すなわち、ビエンナーレとして取り組むことになったのである。

2005年の第3回創造都市会議のテーマは「都市遺産の価値創造」で、都市が歴史的に保存してきた文化遺産のみならず、近代産業遺産やバブル経済の遺産なども創造的に活用する方策を検討するために「都市遺産の使いみち」、「都市遺産で演じる」、「都市遺産からの刺激」の3つの分科会が開かれ、あわせて、金沢らしいライトアップや中心市街地でのオープンカフェなどの社会実験の様子が報告された。また、2006年の第3回金沢学会は「都市の引力」をテーマに開催され、2014年に予定されている北陸新幹線の開業に伴って生み出されるプラスとマイナスの効果を予測しつつ、都市金沢の魅力を再発見し、発信することの重要性が確認され、金沢らしい風情を残すために、存続の危機にある和風旅館を保存するための緊急施策が提案された。

そして、昨年（2013年）の第4回創造都市会議は「都市間競争」をテーマに、世界的にクリエイティブ・クラスの誘致を巡る競争激化が予測される中で創造都市の連携を考える一方、「金沢をうたう、みる、あそぶ」の3つの視点から捉え直し、世界的な創造都市としての評価を確立することが提唱された。

この会議では、実行委員として著名な都市研究者や文化人のほか、地元からは経済人や市民、そして金沢市長をはじめ行政のリーダーたちも加わり、社会実験の結果や視野の広い討論を踏まえながら、創造都市をめざす総合的な取組が推進されている。ユネスコの提唱する創造都市ネットワークへの申請により、官民連携による工芸都市づくりへ向けて、金沢創造都市会議の活動は、新たに大きな一歩を踏み出すこととなる。

さらに、今般のクラフト都市への申請にあたっては、行政と工芸団体、経済団体、市民団体からなる金沢創造都市推進委員会が組織されており、本年10月には、この推進委員会の主催により、創造都市ネットワーク登録都市であるサンタフェ（フォークアート）やベルリン（デザイン）、ボローニャ（音楽）を招聘し「世界創造都市フォーラム2008 in KANAZAWA」が開催された。その中で採択された「金沢アジェンダ」においても、“公共、民間、市民セクターの連携による都市問題の創造的解決”と官民連携が謳われている。この世界創造都市フォーラムは来年度以降も継続して開催することとしており、官民連携の組織によるユネスコ創造都市との交流を推進していく。

特に、本フォーラムでフォークアート都市であるサンタフェから発表があった「クリエイティブ・ツーリズム」については、今後とも、サンタフェをはじめとするネットワークメンバーと互いの観光政策や観光商品に関する情報交換等を進め、工芸作家や旅行者と連携したツーリズム形態を深化させていきたいと考えている。

また、工芸分野においては、先述したとおり、既に10年以上にわたる官民連携のフォーラムがある。このフォーラムをこれまでの実績を踏まえ拡充し、2010年には、金沢の工芸の伝統的技法、技術の継承・発信と後継者の人材育成を強化すべくゲストキュレーター企画による世界と金沢の工芸品選抜展覧会である「金沢・世界工芸トリエンナーレ」として、世界創造都市フォーラムと連携させて開催することとしており、多面的に工芸における官民パートナーシップの推進を強化していくものである。

おわりに

これまでに見てきたとおり、金沢市はすでに、経済界と市民、行政が手を携えて、創造都市の実現に向けて着実な歩みを進めており、金沢創造都市会議においては準備段階を含めるとすでに10年の実績があり、官民一体となって、金沢市民芸術村や金沢21世紀美術館を活かした創造人材の養成や創造産業の振興、都心再生など総合的な都市政策を展開してきた日本の創造都市の代表であると自負がある。

このたび、ユネスコ創造都市ネットワークのクラフト分野への申請にあたり、グローバルな視点から見た都市・金沢が登録される意義と重要性は、以下の点にまとめられよう。

第1に、アジア、とくに日本的な特徴を色濃く帯びた工芸都市であり、アジアにおける創造都市の誕生は、ユネスコが提唱する文化的多様性の実現に資するという点である。フォークアートの分野では、すでに、サンタフェとアスワンが認定されているが、アジアにおいては、いまだ認定されておらず、金沢が認定されることによって、ユネスコが提唱する文化的多様性がクラフトの面においても実現することになる。また、アジアの中でも、金沢は、日本文化の固有性が際立った都市であるということに特別の意味があり、サミエル・ハンチントンが世界文明の類型化にあたって中国やインドとも異なる類型として日本を取り上げているように、単に、東洋と西洋という対比にとどまらない視点が見出されるのである。

第2に、金沢市は人口45万人という中規模都市であり、その代表として、登録を目指す点である。世界的には、人口30～50万人の規模の都市が大多数を占めており、サンタフェ等と異なり、それら中規模都市の代表としてユネスコ創造都市のネットワークに加わることは大きな意義があろう。

第3に、地球規模の課題である環境面からも、創造都市ネットワークの発展にとって有意義であるという点である。昨今の地球環境の危機的状況において、都市環境の維持可能性は大きな課題になっており、化石燃料を大量に消費しない手仕事のまち、金沢の登録は、その面からも、創造都市ネットワークの発展にとっても有意義なことであろう。

最後に、創造都市の世界的なネットワークの広がりを通じて、発展途上国の工芸振興、ひいては世界平和の実現に寄与していきたい、ということである。金沢の歴史を振り返ったとき、約420年余りの間、戦禍に遭わず、文化を育んできたことから、世界平和に対する市民の思いは大きなものがある。また、これまでも国際協力シンポジウムの開催や国際的な人材交流などを通し、発展途上国を始めとする諸外国における工芸の振興や工芸を担う人材の育成に努めていることから、金沢は、創造都市の世界的なネットワークの広がりによって、より一層、世界的な工芸振興、世界平和の実現に寄与していくことができるのである。

金沢市は、他のユネスコ創造都市とともに、市場における芸術家同士の交流や、ネットワークのメンバーが経験できるクリエイティブ・ツーリズムの機会を創り出すこと、さらに、ユネスコ創造都市のメンバーの間で、革新的な技術のデザインを高めるための工芸技法についての交流といった分野に参加するよう心がけていく。

以上の点から、ユネスコ創造都市ネットワークに金沢市が登録されることは、日本やアジアにとってのみならず、世界の都市と市民にとっても大きな意義があるのである。

【参考資料】

▼金沢創造都市推進委員会名簿

役 職	氏 名	肩 書 き
顧 問	大樋 長左衛門	金沢市工芸協会会長
会 長	山 出 保	金沢市長
実行委員長	福 光 松太郎	金沢創造都市会議実行委員長 (社団法人金沢経済同友会副代表幹事)
副実行委員長	佐々木 雅 幸	NPO法人金沢創造都市フォーラム副理事長
副実行委員長	森 源 二	金沢市副市長
委 員	秋 元 雄 史	金沢21世紀美術館館長
委 員	久 世 建 二	金沢美術工芸大学学長
委 員	作 田 勝	金沢工芸普及推進協会理事長
委 員	中 川 衛	金沢市工芸協会理事長
委 員	中 島 秀 雄	金沢ファッションウィーク実行委員長 (金沢商工会議所副会頭)
委 員	藤 村 盛 造	金沢ファッション産業創造機構機構長

役 職	氏 名	肩 書 き
幹 事	相 川 繁 隆	金沢卯辰山工芸工房館長補佐
幹 事	市 島 桜 魚	金沢学院大学美術文化学部教授
幹 事	大 樋 年 雄	金沢市工芸協会副理事長
幹 事	川 本 敦 久	金沢美術工芸大学造形芸術総合研究所所長
幹 事	志 甫 雅 人	財団法人石川県デザインセンター 事務局次長兼チーフディレクター
幹 事	永 井 隆	社団法人金沢職人大学校事務長
幹 事	丸 口 邦 雄	金沢市都市政策局長
監 事	村 浜 肇	社団法人金沢経済同友会事務局長
監 事	小 柳 正 人	金沢市会計課長

▼金沢の主な伝統工芸(22業種)

名 称	概 要
<p>加賀友禅</p>	<p>加賀梅染に、江戸時代に友禅染めの祖である宮崎友禅齋が彩色を手掛けて以来、高いブランド価値を維持している。</p> 
<p>九谷焼 (金沢九谷)</p>	<p>約200年前から華麗な色絵を重んじ、「五彩」とよばれる、赤・黄・緑・紫・紺青の5色での絵の具を厚く盛り上げて塗る彩法が特徴。</p> 
<p>金沢仏壇</p>	<p>藩主前田利常の頃、江戸や京都から名工たちを加賀藩細工所に呼び集めて基礎を築いた。</p> 
<p>金箔箔</p>	<p>藩祖前田利家が箔の製造を命じて以来発展し、現在は金箔製造の99%を占めている。</p> 

名 称	概 要
<p>金沢漆器</p>	<p>藩細工所に呼び集められた蒔絵師、五十嵐道甫や清水九兵衛により技術が伝えられ発展した。</p> 
<p>加賀繡</p>	<p>室町時代、仏教の布教に伴い、仏前の打敷や僧侶の袈裟など装飾技法として京都から伝えられた。</p> 
<p>大樋焼</p>	<p>藩主前田綱紀が京都から招いた千宋室仙叟に同道した陶工初代土師長左衛門が伝えた飴色の楽焼。</p> 
<p>加賀象嵌</p>	<p>刀装具などに用いられる金属加飾法で、現在では、花器などへの近代的な装飾として用いられている。</p> 
<p>加賀毛針</p>	<p>加賀藩で武士の内職として作られた鮎釣り専用の針で、野鳥の羽毛を使い金箔が施されている。</p> 

名 称	概 要
茶の湯釜	<p>五代藩主に仕えた宮崎彦九郎の子・義一が始祖で、一貫工程によるきめの粗い肌が特徴。</p> 
銅鑼	<p>人間国宝である故初代魚住為楽によってその製法が見出され、代々継承されている。</p> 
二俣和紙	<p>献上紙漉き場として藩の特別な庇護を受け、加賀奉書など高級な公用紙が漉かれてきた。</p> 
金沢和傘	<p>藩政時代より明治・大正と盛んに作られ、貼り込む紙に楮紙を用いて、丈夫であることが特徴。</p> 
三弦	<p>藩政時代からの芝居、そして東、西、主計町の花柳界を中心に発展を遂げ、音色を重視してきた。</p> 

名 称	概 要
加賀水引	<p>加賀藩では実用品よりも装飾品として用いられ、現在でも水引の技術も進歩している。</p> 
竹工芸	<p>加賀藩細工所の竹工が始祖で、茶道具や華道の隆盛とともに芸術的な竹工芸の技術が発展した。</p> 
加賀提灯	<p>16世紀後半から松明代わりに作られ、竹骨を一本一本輪にして留めてあり、丈夫なことが特徴。</p> 
金沢桐工芸	<p>良質の桐材とろくろ木地師の技、そして加賀蒔絵の伝統が、金沢桐工芸の基礎を作り上げた。表面を焼いて磨いた独特の焼肌が特徴。</p> 
郷土玩具	<p>加賀藩三代藩主の前田利常が人形師に作らせたのが始まりといわれ、その後は武士の手内職として受け継がれた。</p> 

名 称	概 要	
加賀竿	<p>漆塗りや加飾がほどこされ、優美さと堅牢さが特長である。本物志向の支持を集め、釣竿の最高級品として根強い人気を保ちつづけている。</p>	
琴	<p>蒔絵や螺鈿をふんだんに使った雅なものが多く、楽器の域を超えて芸術品や装飾品といった趣があることが特徴。</p>	
金沢表具	<p>藩政時代には御用表具師がいた記録があり、京表具、江戸表具と並び全国に知られる。文化財の修復にも活かされる高度な技術が特徴。</p>	

▼工芸関連団体の現況

1 金沢市工芸協会

- (1)所在地 金沢市
- (2)設立 1957年(前身の金沢市意匠図案研究会は1938年設立)
- (3)会長 大樋 長左衛門
- (4)会員数 163名

2 金沢工芸普及推進協会

- (1)所在地 金沢市広坂1-2-25
- (2)設立 2002年
- (3)理事長 作田 勝

3 協同組合加賀染振興協会

- (1)所在地 金沢市小将町8-8
- (2)設立 1973年
- (3)理事長 石山 外司郎
- (4)会員数 287名

4 金沢九谷振興協同組合

- (1)所在地 金沢市片町1-3-22
- (2)設立 1969年
- (3)理事長 鏑木 基由
- (4)会員数 39名

5 金沢仏壇商工業協同組合

- (1)所在地 金沢市武蔵町8-2
- (2)設立 1959年
- (3)理事長 山田 泰造
- (4)会員数 42名

6 石川県箔商工業協同組合

- (1)所在地 金沢市福久町口172
- (2)設立 1950年
- (3)理事長 蚊谷 八郎
- (4)会員数 129社

7 金沢漆器商工業協同組合

- (1)所在地 金沢市尾山町9-13
- (2)設 立 1978年
- (3)理事長 岡 能久
- (4)会員数 57名

8 石川県加賀刺繍協同組合

- (1)所在地 金沢市東力町1-130
- (2)設 立 1990年
- (3)理事長 今井 潔
- (4)会員数 8名

9 石川県クラフトデザイン協会

- (1)所在地 金沢市別所ム3-34
- (2)設 立 1972年
- (3)会 長 小堀 幸穂
- (4)会員数 47名

▼団体等のホームページ

金沢市民芸術村

<http://www.artvillage.gr.jp/#>

金沢21世紀美術館

<http://www.kanazawa21.jp/ja/index.html>

金沢美術工芸大学

http://www.kanazawa-bidai.ac.jp/www/contents/top/index_noflash.html

金沢職人大学校

<http://www.k-syokudai.or.jp/>

金沢卯辰山工芸工房

<http://www.utatsu-craft.gr.jp/>

金沢ファッション産業創造機構

<http://ockfi.kanazawacity.jp/>

オーケストラ・アンサンブル金沢

<http://www.orchestra-ensemble-kanazawa.jp/>

金沢工芸普及推進協会

<http://www.crafts-hirosaka.jp/kougei/>

協働組合 加賀染振興協会

<http://www.kagayuzen.or.jp/>

金沢仏壇商工業協同組合

<http://kanazawa-butsudan.or.jp/>

石川県加賀刺繍協同組合

<http://www.kaganui.or.jp/>

▼金沢美術工芸大学の変遷

1946年	金沢美術工芸専門学校を設立 (本科3年、予科1年制 美術科45人、陶磁科30人、漆工科30人、金工科15人 計120人)
1950年	1950年 金沢美術工芸短期大学を設立 (3年制 美術科45人、工芸科75人 計120人)
1955年	金沢美術工芸大学を設立 (4年制 美術科40人、産業美術学科60人 計100人)
1965年	美術学科定員を1学年40人から55人に増員 産業美術学科に工芸・繊維デザイン専攻15人を設置 計130人
1970年	聴講生制度を設置
1972年	美術工芸研究所を設置、新校舎完成
1979年	大学院を設置、大学院棟完成 (絵画・彫刻専攻、産業デザイン専攻修士課程)
1986年	美術学科に芸術学専攻10人を設置 計140人 伝統工芸聴講生制度を設置
1990年	大学院に芸術学専攻修士課程を設置
1991年	工芸デザイン専攻を1学年15人から20人に増員 計145人
1992年	工芸実習棟完成
1996年	美術工芸学部、美術科、デザイン科、工芸科を設置
1997年	大学院に美術工芸専攻博士後期課程を設置
2000年	大学院修士課程を再編 (絵画専攻、彫刻専攻、工芸専攻、デザイン専攻)
2001年	映像メディア室を設置
2005年	大学院修士課程デザイン専攻にファッションデザインコースを設置
2007年	美術工芸研究所を造形芸術総合研究所に改称

▼金沢美術工芸大学の卒業生数(デザイン及び工芸)

金沢美術工芸専門学校、
金沢美術工芸短期大学

計 232人

1950～1959年卒業	陶磁 106人 漆工 79人 金工 47人
--------------	-----------------------------

金沢美術工芸大学

計 3,840人

(学部)

1958～1999年卒業	商業デザイン 1,162人 工業デザイン 1,161人
1969～1999年卒業	工芸デザイン 507人
2000～2008年卒業	視覚デザイン専攻 175人 製品デザイン専攻 173人 環境デザイン専攻 176人 工芸科 174人

(大学院修士課程)

1981～2008年卒業	視覚デザインコース 39人 製品デザインコース 45人 工芸デザインコース、工芸専攻 202人
2002～2008年卒業	環境デザインコース 16人
2007～2008年卒業	ファッションデザインコース 6人

(大学院博士後期課程)

2000～2008年卒業	プロダクト 2人 環境 1人 工芸 4人
--------------	----------------------------

▼金沢美術工芸大学の卒業生たちの活躍状況

<p>塗師 祥一郎</p>	<p>1953年 洋画科卒業 洋画家、日本芸術院会員、日展常務理事 日展で2度の特選、1997年には文部大臣賞を受賞。 2003年、日本芸術院賞を受賞。</p>
<p>田保橋 淳</p>	<p>1953年 美術学科卒業 クリエイティブディレクター 株式会社電通に入社し、松下電器やソニー、ビクター など大手企業の広告デザインを担当し、数多くの広 告賞を受賞。</p>
<p>土肥 信一</p>	<p>1955年 洋画科卒業 メトロポリタン美術館学芸員 1965年より、ニューヨーク・メトロポリタン美術館 で美術品の修復スタッフとして、世界各国の国宝級 の美術品修復を手がけている。</p>
<p>前 史雄</p>	<p>1963年 美術学科卒業 漆芸作家、人間国宝「沈金」 人間国宝の前大峰より沈金の技術を学ぶ。1971年に 日本工芸会正会員となり、1973年日本伝統工芸展文 部大臣賞、1992年日本伝統工芸展総裁賞を受賞。</p>
<p>中川 衛</p>	<p>1971年 産業美術学科卒業 加賀象嵌作家、人間国宝「彫金」、 金沢美術工芸大学教授 1974年、加賀象嵌作家の高橋介州氏に師事し象嵌を 学ぶ。1979年から日本伝統工芸展で連続入選。2004 年、彫金で重要無形文化財保持者「人間国宝」の認 定を受ける。</p>

川崎 和男	<p>1972年 デザイン科卒業 デザインディレクター、医学博士 毎日デザイン賞、ニューヨーク近代美術館永久展示、 フランスシルモ展デザインコンペのグランプリ等、国 内外のデザイン賞を個人として最多受賞している。</p>
早川 和良	<p>1975年 彫刻科卒業 CMディレクター、株式会社CampKAZ代表取締役 ソニーやライオン、JR東海など大手企業のヒット CMを手がける。カンヌ国際広告祭金賞、ニューヨー クフェスティバル国際広告賞金賞など数多くの広告 賞を獲得。</p>
宮本 茂	<p>1977年 デザイン科卒業 任天堂株式会社 代表取締役、ゲームクリエイター スーパーマリオブラザーズやドンキーコング等の作 品制作、Wiiの開発など、世界的に有名なゲームクリ エイター。「現代コンピュータの父」「テレビゲーム 界の魔術師」等といわれ、2007年、米タイム誌の「世 界に影響を与えた100人」に、日本人としてトヨタ 自動車の渡辺社長と並んで選ばれた。</p>
日高 一樹	<p>1977年 工業デザイン科卒業 日高国際特許事務所 所長 弁理士として特許出願業務とともに、商品のデザイ ン・技術開発から経営コンサルティングを手がける。</p>
小泉 巖	<p>1982年 産業美術学科卒業 マツダ株式会社 チーフディレクター 東洋工業株式会社（現マツダ）に入社し、初代フェ スティバ、ユーノスコスモ、プレマシーなどのデザ インを手がける。</p>
丹羽 政良	<p>1983年 商業デザイン科卒業 株式会社電通 インタラクティブディレクター 大手企業の新聞、雑誌の広告を手がけ、多くの広告 賞を受賞。</p>

<p>大蔵 泰平</p>	<p>1986年 大学院産業デザイン専攻修了 株式会社電通 クリエイティブディレクター トヨタ、カルピスなど大手企業のグラフィックを担当。</p>
<p>石川 善都</p>	<p>1991年 大学院製品デザイン専攻修了 松下電器産業株式会社 モバイルグループ コミュニケーションチーム チームリーダー コミュニケーションツールデザインを軸に携帯電話 ドコモPシリーズ・家庭用コードレス電話などのデ ザイン開発を担当。</p>
<p>細田 守</p>	<p>1991年 美術科卒業 アニメーション監督 2006年に公開されたSFアニメ映画「時をかける少 女」を監督。同作品は、第30回日本アカデミー賞で、 最優秀アニメーション作品賞を受賞。</p>

【別添】

世界工芸都市宣言

私たちのまち金沢は、香り高い伝統文化と四季折々の美しい自然の中で、多くの名工を輩出し、世界に誇る幾多の手技による名品を生み出すとともに、市民生活の中に格調高い技と美に対する豊かな感性をはぐくんできた。

私たちすべての市民は、

- 1 美しい伝統的・文化的遺産と環境の保全
- 1 伝統的で高度な技法・技術の継承と後継者の育成
- 1 未来に向けた生き生きとした創造精神の発揚
- 1 新しい独自の個性を持った創作活動の支援

を基本に、さらなる新しい「ものづくりのこころ」を世界に向け継承、発信していくことを宣言する。

1995年9月26日議決

伝統工芸と環境に関する「金沢アピール」

1997年11月7日

1997年11月6～7日の両日、石川県金沢市に於いて、いしかわ国際協力研究機構主催、国際連合大学高等研究所協力による国際協力シンポジウム「伝統工芸と環境・地域振興の可能性を求めて」が開催された。基調講演に国際連合大学学長ハンス・J・A・ファン・ヒンケル氏、基調報告に世界工芸協議会のオマール・ベナブダラー氏を迎え、シンポジウムのパネリストを含む多くの参加者と共に伝統工芸と環境について活発な議論が交わされた。

当シンポジウムに参加した我々一同（別添）は、シンポジウムで表明された様々な意見等を踏まえ、伝統工芸の振興と環境の改善、地域の振興、ひいては生活の向上を図るため、人々の伝統工芸に対する意識の向上を促し、更にまた伝統工芸を環境と関連づけながら振興させていくための新しい方法を模索するという共通の見地から、以下の現状認識を提示し、提言する。

現状認識:

- 1 伝統工芸は人々の真の文化的アイデンティティ（独自性）の象徴であり、それは自然環境と調和しながら発展した文化遺産の重要な要素であって、過去の伝統と結びつくと同時に、将来に引き継がれていくものである。
- 2 伝統工芸の役割は、社会形成にきわめて重要なものがあり、通信技術、コンピューター、情報管理、自動化などの進歩によって先導され、もたらされた激変に押し流されている現代社会において、自己のアイデンティティと全体性を維持していく上で伝統工芸の重要性は増している。
- 3 莫大な数量で大量生産される商品が生み出す現代のストレスに満ちた社会では、手作りで世代から世代に伝承されてきた伝統工芸は、特別な人間的価値をもっている。
- 4 伝統的職人の技能は、単に過去のスタイル（形）を模倣し、技法を保持してきただけのものではなく、伝統の上に磨かれてきたものであり、伝統工芸は純粋な芸術的表現を通じて職人固有の技能と創造性で文化的遺産を表現したものである。
- 5 多くの発展途上国では工芸品の生産は、特に女性、その他社会的弱者に対する雇用手段として重要であり、貧困の軽減につながり、これらの国々の経済、特に地域の振興のために役立つものととらえられている。

- 6 伝統的手工芸品は多くの国々で一般に工業製品との価格競争の結果として消滅しつつあり、またその職人の賃金は平均賃金よりかなり低い水準になっている。
- 7 多くの国々では、工芸職人の仕事に関心をもつ若者の数が減少しており、また原材料と道具を供給する中間者も同様である。これらの後継者不足は伝統工芸の将来に危機的な結果をもたらす恐れがある。
- 8 伝統工芸の職人が誇りをもって工芸に携わり、同時にそれを助成し発展させていくために、国際的協力及びアイデア（技術）の交流を促進する新しい方法を模索しなければならない。
- 9 伝統工芸は、そのコンセプト（概念）やデザインをより柔軟に変え、新しい市場と使用者の要求に対して対応が可能である。
- 10 環境保護は既に周知の大きな課題であり、環境の改善は全人類の緊急の念願となっており、産業界及びビジネス界は環境破壊を防ぐ上で、主な役割を果たす可能性を有している。
- 11 持続可能な開発は、現代の消費生活において大量生産によってもたらされた使い捨て指向から、より耐久性があり、エネルギーと原材料の節約につながる商品指向への変化を必要としている。
- 12 地域内での自然の原材料の不足が伝統工芸に悪影響を及ぼすことから、環境保全は伝統工芸の原材料確保にとって極めて重要である。
- 13 一般に伝統工芸のもつ価値への人々の認識は不十分であり、その向上のための具体的取り組みが必要である。
- 14 多くの分野の組織・機関、特に企業、地方・中央政府並びに個人は、各々の価値基準や活動を集約させて、伝統工芸の今後の発展を具体化していくべきである。
- 15 伝統工芸への振興を適切に効果的に進めるためには、それぞれの国の社会的、文化的側面を考慮することが重要である。

提言

我々は、世界工芸協議会（WCC）、工芸振興国際センター（CIPA）、国際伝統工芸振興事業団（AIDA）、国際連合大学（UNU）、国連教育科学文化機関（UNESCO）、国際貿易センター（ITC）、各国及び地域の工芸協議会・協会、企業や大学、研究機関、地域の指導者、その他伝統工芸に関心を持つ全ての政府・行政機関に対し、以下のことを訴える。

- 1 産業として存続可能で、文化的価値を伴い、そして環境に優しい伝統工芸品が日常生活で使われ、美しさが保たれ、価格的にも購入可能なものとして、発展、促進されるために、特別な注意が払われるべきである。
- 2 良質の家や環境に優しい建造物を建築するために、建築、建設分野においても配慮されるべきである。
- 3 工芸職人の所得向上の観点から、雇用の機会を増やし、公正で利益のある価格設定がなされるよう努力すべきである。
- 4 若い世代に伝統工芸を正しく評価してもらえよう、その推奨に務め、後継者の育成に必要な手段が講じられるべきである。
- 5 必要に応じて調査、研究、研修、教育の活動を行い、環境に優しい伝統工芸の振興と更なる市場獲得のための新しい技術、デザイン、アイデアを普及させるよう努力すべきである。
- 6 各国は工芸や環境、また人々の健康にとって安全性の確保を目的に、伝統工芸と環境の調和を示すため、原材料を明示するシステムを確立すべきであり、まずは食生活に関わる器物及び、玩具から始めるべきである。
- 7 教育や意識向上を目的としたキャンペーン等を通じ、工芸への認識を高め、またメディアの協力により、工芸職人の仕事に関し知識を普及させ、伝統工芸品への敬意や評価を高めていくべきである。
- 8 環境に敏感でかつ文化を尊重した方法で伝統工芸を振興していくために、工芸職人、デザイナーと、産業界の間でよりよい意志疎通を図るべきである。

- 9 伝統工芸に関する知識・理解、意識の向上や、伝統工芸の復興ないし保存は、人類の存続及び自然環境を身近に感じ、文化的な独自性を維持したいという人間の欲求と願望に結びついていることを認識すべきであり、そのための国際的な協力関係や意見交換の促進が望まれる。
- 10 このアピールの精神を反映し、将来の活動内容を具体化するための専門作業グループを組織すべきである。

我々一同は、以下の事項を確認する。

以上に述べた活動を体系的かつ円滑に推進するため、この国際シンポジウムに参加した個人・組織によるネットワークを構築し、更にインターネット等を通じてこの問題に関心を持つ人々にネットワークへの参加を呼びかけ、対話と意見交換のシステムを拡げる。

伝統工芸分野の振興、及び発展に努め、決断力、希望、協力、そして協調性をもった活動が必要であることに同意し、21世紀に向けての国際的なネットワーク構築に邁進する。

別添

**伝統工芸と環境地域振興の可能性を求めて
1997年11月6、7日 石川県金沢市にて**

パネリスト

(アルファベット順)

オマール・アミネ・ベナブダラー
(Omar Amine Benabdallah)
世界工芸協議会会長
モロッコ

ドミニク・ブシャー
(Dominique Bouchart)
国際伝統工芸振興事業団事務局長
フランス

グヨン・チャン
(Guyon Chung)
グヨン建築設計事務所代表
韓国

乾 由明
(Yoshiaki Inui)
金沢美術工芸大学学長
石川県

上出 兼太郎
(Kentaro Kamide)
石川県九谷陶磁器商工業協同組合
連合会理事長
石川県

鹿野 勝彦
(Katsuhiko Kano)
金沢大学文学部教授
石川県

熊野谿 従
(Jyu Kumanotani)
東京大学名誉教授
東京都

アフマッド・モクタン
(A.K.P. Mochtan)
国際戦略問題研究所研究員
インドネシア

プラニ・オブハサノンド
(Prani Obuhasanond)
タイ家内・手工芸産業開発局副部長
タイ

小川 長楽
(Choraku Ogawa)
日本工芸協議会副会長
京都市

ビジャヤ・ラジャン
(Vijaya Rajan)
世界工芸協議会アジア地区副会長
インド

坂本 憲一
(Kenichi Sakamoto)
国連大学高等研究所研究員
東京

佐々木 雅幸
(Masayuki Sasaki)
金沢大学経済学部教授
石川県

ラトナ・ラナ
(Ratna S.J.B. Rana)
いしかわ国際協力研究機構所長
石川県

「文化的多様性と創造都市の連携・発展のための金沢アジェンダ」

“世界創造都市フォーラム2008 in KANAZAWA”（10月17日）に参加した私たちは、シンポジウムにおける発表と討論を通じて、以下のとおり、共通の目標をもって行動することを宣言するものである。

グローバル化と知識情報化の進展がもたらす文化の画一化や社会的経済的格差に抗して、文化的多様性を保持し、市民の生活の質を高めるためには、固有の文化と産業の連環により持続可能な発展を遂げる「創造都市」の実現こそが緊要であり、世界が目指すべき都市像であると考えられる。

そのために、以下の諸点について、その重要性を参加者一同で合意し、創造都市の実現とさらなる発展に向けて、各方面に働きかけるものとする。

- (1) 都市固有の文化と文化的多様性にもとづく創造都市の展開
- (2) 市民の生活の質を高め、都市経済の推進力となる多様な創造的文化産業の発展
- (3) 創造都市における芸術家の文化的、社会的、経済的な役割
- (4) 公共、民間、市民セクターの連携による都市問題の創造的解決
- (5) ユネスコが進める文化的多様性への取組と連動したグローバルなレベルでの都市相互の連携をはじめ、アジアレベル、全国レベルでのネットワークの構築

2008年10月17日

世界創造都市フォーラム2008 in KANAZAWA 参加者一同



Kanazawa, Japan City of Craft

